

## SEND プログラム

ASEAN 諸大学学生のための「京都で学ぶアジアと日本」研修

北京大学学生のための「京都サマースクール」

榎木 哲夫 (国際交流センター センター長・教授)

河合 淳子 (国際交流センター 教授)

韓 立友 (国際交流推進機構 特任准教授)

稲垣 和也 (アジア研究教育ユニット 特定助教)



# SEND プログラム 2015 年度受入実施報告書

## ASEAN諸大学学生のための「京都で学ぶアジアと日本」研修 北京大学学生のための「京都サマースクール」

榎木 哲夫（国際交流センター センター長・教授）

河合 淳子（国際交流センター 教授）

韓 立友（国際交流推進機構 特任准教授）

稲垣 和也（アジア研究教育ユニット 特定助教）



## 目次

はじめに .....	iii
1 SEND プログラム.....	1
1.1 概要 .....	1
1.2 SEND 準備.....	1
1.2.1 全学共通科目「日本語・日本文化演習」の開講.....	1
1.2.2 情報共有.....	3
2 実施状況.....	4

## 第一部

1 北京大学学生のための「京都サマースクール」 .....	6
1.1 設立の経緯と目的.....	6
1.2 「京都サマースクール」概要.....	6
1.2.1 プログラム内容.....	6
1.2.2 実施体制・教員確保と京都大学学生アシスタントの関与 .....	7
1.2.3 カリキュラムの特徴.....	7
1.2.4 使用言語.....	7
1.3 今後の展望 .....	8
2 実施体制.....	9
3 参加学生一覧.....	10
4 研修日程.....	11
5 参加学生報告 .....	13

## 第二部

1	ASEAN 諸大学学生のための「京都で学ぶアジアと日本」研修 .....	30
1.1	設立の経緯と目的.....	30
1.2	「京都で学ぶアジアと日本」研修概要 .....	30
1.2.1	プログラム内容.....	30
1.2.2	実施体制と教員確保.....	32
1.2.3	京都大学学生アシスタント .....	32
1.2.4	カリキュラムの特徴.....	34
1.2.5	実施時期および期間.....	36
1.3	今後の課題 .....	36
2	実施体制.....	37
3	参加学生一覧.....	38
4	研修日程.....	39
4.1	日本語Ⅰ .....	44
4.2	日本語Ⅱ .....	46
4.3	日本語Ⅲ .....	48
4.4	書道 .....	50
4.5	文化講義 “History and culture of Kyoto” .....	52
4.6	文化講義「学校教育に見る日本文化の諸相」 .....	53
4.7	文化講義「簡単！古文書入門」 .....	54
4.8	学外研修：文化財の保護.....	55
4.9	文化講義「日本古典文学に見る日本人の美意識」 .....	56
4.10	文化講義「日本列島の言語文化」 .....	57
4.11	学外研修（友禅染、和菓子作り） .....	58
4.12	学外研修：留学生と訪ねる琵琶湖疏水と琵琶湖・沖島 .....	59
4.13	SEND 発表.....	60
5	参加学生報告.....	61

## はじめに

グローバルな学生の流動性の必要性が叫ばれているなか、京都大学においても国際交流センターが独自に実施する学生受入事業としていくつかの事業を展開している。とくに来年度以降の第三期中期目標中期計画においても、海外大学からの短期受け入れ体制の拡充化は、ますます重要な位置づけとなりつつある。

本事業は、そのような取組のうち、SEND プログラムとして今年度開催された、ASEAN 諸大学学生のための「京都で学ぶアジアと日本」研修と北京大学学生のための「京都サマースクール」の2つの事業についてまとめている。それぞれのプログラムが開始された当初の経緯は異なる事情があり、北京大学のサマー受入プログラムは今年4年目を迎える一方で、「京都で学ぶアジアと日本」プログラムはこれまで SEND プログラムとしてアセアンへの学生派遣事業は実施してきたものの、アセアン諸国からの学生の受入事業を開始したのは昨年度からで、今年度が二年度目にあたる。



まず北京大学からは学生 15 名を夏休み中に京都大学に受入れ、京都大学の教授陣の講義の聴講や研究所見学を行った。さらに日本の文化をより理解してもらうべく、日本文化に関する講義や京都府内各地域の見学を行った。また学生交流の観点から、京都大学の学生を全学から募集し、共学の機会や週末を含めた自由時間でのイベント企画、北京大学の学生を案内することで交流を深めた。この事業は、京都府の学生受入事業と共催の形で実施され、京都府には府内の実地研修などをアレンジ頂いた。8月17日に実施した最初のオリエンテーションでは、参加した北京大学の学生達の生き生きとした表情が印象的であった。折しも京都では、その前夜に夏の風物詩である五山の送り火が開催されたこともあり、オリエンテーションでの機構長からの挨拶のなかでもこの行事の意味について触れられたが、学生達にとって異文化学習プログラムを始めるに相応しいスタートとなったのではないだろうか。参加者からの報告にもあるように、日本に初めて来た驚きとともに、京都大学に対する先進的学問への興味、京都に対する親近感、街の美しさなどが述べられており、京都ひいては日本への進学などを考えるよいきっかけとなったものとする。

もう一つの受入事業であるアセアン対象「京都で学ぶアジアと日本」プログラムは、文部科学省による大学の世界展開力強化事業「『開かれた ASEAN+6』による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成」は、平成 24 年度に開始、平成 25 年度より本格的な活動の実施を始めた。26 年度には初めて、タイ（チュラーロンコーン大学）5 名、ベトナム（ハノイ国家大学 外国語大学 5 名、人文社会科学大学 5 名）10 名の計 15 名の学生を受け入れたが、今年度は派遣元の大学も拡充し、チュラーロンコーン大学、ハノイ国家大学に加えて、インドネシア大学からの参加者も含めた 11 名が参加して、2 月 7 日から 2 週間に亘って実施された。本研修は ASEAN 諸大学との双方向的関係強化をミッションとして謳っており、研修では 15 名の京都大学の学部・修士学生がともに参加して共学の機会を得た。この

経験を糧にこれらの京都大学学生が、今度はアセアンへの学生派遣事業に興味をもってくれることを期待している。本研修におけるカリキュラムの全体的な特徴は、日本語学習、学術的文化学習、学内外環境文化学習、共同学習を柱とした、日本語・日本文化の短期集中コースである。これまで国際交流センターが堅実に積み上げてきた長年の実績やノウハウと、京都大学アジア研究教育ユニットが構想している世界展開力強化および様々なプログラムの事例蓄積が融合され、国内外を見ても類のない、非常に高い質・独創性をもった研修内容を提供出来たのではないかと自負している。

上記二例のプログラムでは、参加学生には京都大学の短期交流学生の身分が与えられた。いずれのプログラムでも、多くの参加学生にとっては初めて日本での滞在を経験する中で、京都大学で実施されている先端研究の一端から京都・日本の文化に至るまで、日頃はまず経験することのない学修を毎日経験する機会を得られた。このような短期研修の留学は、参加学生にとっては一つの「旅」として位置づけられる。日本を訪れる旅であることは勿論のこと、もう一つの意味での「旅」、すなわち“A Learning Journey”、すなわち「学びの旅」に喩えられよう。異文化の新天地に飛び込み、使い慣れた地図を頼りに旅を出来る訳ではなく、むしろ、京都での初めての経験を通じて、参加者それぞれの中に、独自の地図を描き始めてくれたのではないかと考える。そして描き始めたその地図を頼りに、今度は本格的な長期の留学を目指して、京都大学に根をおろして滞在したいと思い立ってくれることを期待してやまない。

関係各位のご尽力により、平成 27 年度の受入事業は、学生の大きな問題もなく終了することができた。今年度の短期学生受入事業に対して、ご協力を賜った韓立友特任准教授と稲垣和也特定助教はじめアジア研究教育ユニットの先生方、また学内各部局の先生方、国際交流センターおよび農学研究科の事務関係者の方々、そして京都府知事室長および知事直轄組織国際課の職員の皆様、連携諸大学の教職員の方々に心より謝意を表したい。受入学生の講義及び日本語授業を担当下さった講師各位、受入事務担当各位にもお礼申し上げ、巻頭の言葉としたい。

2016（平成28）年3月

京都大学国際交流センター  
センター長 榎木 哲夫

# 1 SEND プログラム

## 1.1 概要

SEND とは一種のバクロニム (backronym) であり、*Student Exchange - Nippon Discovery* に対応する。これは、京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU) が提供するプログラムの一つである。その主眼は、日本文化・社会を外の視点から捉えなおすことにより、アジア (および世界各国) と日本のあいだの相互理解を促進し、共通の課題の発見・解決を目指すというものである。

KUASU は、平成 24 年度から開始された、文部科学省による大学の世界展開力強化事業のプロジェクト (『開かれた ASEAN+6』による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成) を推進する母体となっている。KUASU を構成するのは、京都大学の文学、経済学、農学、教育学、アジア・アフリカ地域研究の各研究科と、国際交流センター、東南アジア研究所、人文科学研究所、経営管理大学院である。

本報告書は、国際交流センターが主体となって実施された、平成 27 年度の SEND プログラム受入事業について報告するものである。学生受入事業に関しては、表 1 にしめす、短期受入プログラム 2 件が実施された。本報告書では、これら 2 件のプログラムの概要・教育的実践・課題について報告する。

表 1 本報告書で扱う短期受入プログラム一覧

形態	プログラム名称 (実施期間)	対象国
受入	「京都サマースクール」 (平成 27 年 8 月 16 日 ~ 25 日)	中国
受入	「京都で学ぶアジアと日本」研修 (平成 28 年 2 月 7 日 ~ 20 日)	インドネシア、タイ、 ベトナム、(シンガポール)

## 1.2 SEND 準備

### 1.2.1 全学共通科目「日本語・日本文化演習」の開講

SEND プログラムに参加する京都大学学生には、日本語・日本文化についての紹介・説明の実践が課される。派遣プログラムでは、京都大学学生が主体となって派遣先大学にてその実践をおこない、受入プログラムでは、短期交流学生 (短期留学生) が主体となって京都大学にて実践をおこなう。ともに、日本人学生と外国人学生との共学を基盤とする。その準備の一助として、主に国際交流センターの教員がリレー式に担当する、「日本語・日本文化演習」(全学共通科目: 拡大科目群/カルチャー一般科目) を平成 25 年度より開講している。その概要は、以下の表 2 にしめすシラバスの通りである。



表2 平成27年度「日本語・日本文化演習」シラバス

授業科目名、英訳	日本語・日本文化演習 Japanese Language & Culture		担当者所属 職名・氏名	国際交流推進機構 教授 河合 淳子 教授 パリハワダナ ルチラ 准教授 湯川 志貴子 准教授 阪上 優	
群	拡大科目群	系列	カルチャー一般科目	使用言語	日本語／英語
単位数	1単位	週コマ数	1コマ	授業形態	演習
開講年度 開講期	2015 前期／後期	配当学年	全回生	対象学生	全学向
曜日時限	月5／火2		教室	1共22／共北11	
<b>授業の概要・目的</b>					
日本人学生、特に海外大学に短期留学を計画している学生が、留学先大学において日本語を教え、日本文化を紹介するなどの経験とその準備を通して、日本文化を再発見し、その過程においてグローバルな視野に立った物の見方・考え方を養うことを目的とする。					
<b>到達目標</b>					
<ul style="list-style-type: none"> <li>日本語、日本文化を捉える多様な視点を理解すること。</li> <li>本講義で学んだことを生かして、まずは授業内で、日本語や日本文化を実際に紹介する経験をする。</li> </ul>					
<b>授業計画と内容</b>					
多様な文化を有する人たちとの交流の中で、自国文化を多面的に理解し紹介できることが要請される場面は多い。日本人であっても日本語や日本文化について深い理解をもって解説するためには、言語・文化に意識的に向き合わなければならない。本授業は、日本語や日本文化を意識的に捉え、深い理解に立って外国人と見方や考え方を共有できるよう、講義・実習・討議を交えて進めていく。					
1回目 オリエンテーション <講義担当：河合、パリハワダナ、湯川、阪上>					
2～7回目<前期担当：パリハワダナ> <後期担当：河合>					
<ul style="list-style-type: none"> <li>非母語話者に対する日本語教授法解説</li> <li>日本語教授法実習</li> <li>講義内で随時発表の機会を設ける</li> <li>多文化の中の日本文化 一何をどう伝えるかー (講義)</li> <li>日本文化に関するプレゼンテーション準備及び討議 (実習)</li> <li>プレゼンテーション</li> </ul>					
8回目 日本文化とメンタルヘルス<講義担当：阪上>					
9～14回目<前期担当：湯川> <後期担当：パリハワダナ>					
<ul style="list-style-type: none"> <li>多文化の中の日本文化 一何をどう伝えるかー (講義)</li> <li>日本文化に関するプレゼンテーション準備及び討議 (実習)</li> <li>プレゼンテーション</li> <li>非母語話者に対する日本語教授法解説</li> <li>日本語教授法実習</li> <li>講義内で随時発表の機会を設ける</li> </ul>					
海外留学を考える学生を優先するが、これまでとは異なる新しい視点で日本語・日本文化を考えてみようとする学生や留学生の受講も歓迎する。なお、本授業は現在実施されている海外派遣推進プログラム (SEND: Student Exchange - Nippon Discovery) の推奨科目となっている。					
<b>成績評価の方法・観点及び達成度</b>					
積極的参加態度、課題提出、発表、プレゼンテーションを総合して評価する。 配点の割合は講義において示す。					
<b>教科書／参考書等</b>					
プリントを配布する／授業中に紹介する					
<b>授業外学習 (予習・復習) 等</b>					
実習、発表、プレゼンテーションの準備として、段階を追って随時課題が出される。各自、積極的に準備を行うことが求められる。					

## 1.2.2 情報共有

SEND プログラムを実施するため、以下の図 1 にしめすような情報共有体制を整備し、活用した。この情報共有体制は、プログラム実施期間中、期間後も活用した。矢印は、情報の行き来をあらわす。

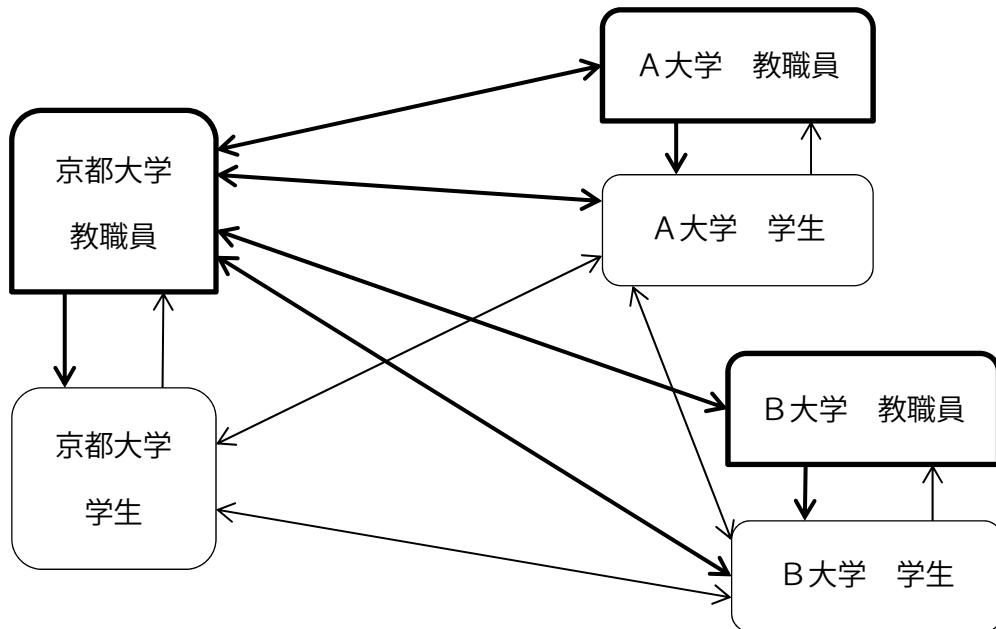


図 1 情報共有体制の概要

共有した情報の内容としては、以下のものがあげられる。

- 教職員－教職員間： プログラムの運営に関する教務・事務の背景情報
- 教職員－学生間： プログラム内容に関する教務・事務的情報
- 学生－学生間： 共同学習に関する情報、プログラム内容に関する事務的情報

情報共有のためのツールとしては、以下のものがあげられる。

- 電話： 教職員・学生を問わず、幅広く使用
- Eメール： おもに教職員－教職員、教職員－学生間で使用  
京都大学教職員は、教職員共用アドレスを活用
- Skype： おもに教員－教員間で使用
- クラウドストレージサービス： ファイル共有のために幅広く利用
- SNS： おもに学生－学生間で使用  
学生間の情報共有の環（図 1 参照）の形成に適している

また、緊急連絡網を作成し、とくに教職員間での危機管理体制の整備に努めた。

## 2 実施状況

本節では、本報告書で扱う2つの受入プログラムへの学生参加状況および費用補助状況の概要について述べる。おもに費用の面から、短期交流学生（短期留学生）の修学を支援する体制には、以下の三種類がある。

- ① 大学の世界展開力強化事業～ASEAN 諸国等との大学間交流形成支援～  
《「開かれた ASEAN+6」による日本再発見－SEND を核とした国際連携人材育成》  
（文部科学省）
- ② 「京都留学生おこしやす事業」（京都府）
- ③ JASSO 奨学金

以下の表 3 では、基本情報（実施期間・応募・参加学生数）、費目別の費用補助該当者数（学費・渡航費・宿泊費・チューター費）、奨学金受給者数（JASSO 奨学金）、各項目の合計人数を、上記 ①～③ による費用負担の該当是非と合わせて示す。

表 3 2015 年度受入プログラムの実施状況概要

	ASEAN 諸大学学生のための 「京都で学ぶアジアと日本」研修	北京大学学生のための 「京都サマースクール」	計
実施期間	平成 28 年 2 月 7～20 日	平成 27 年 8 月 16～25 日	
応募学生数	11 名	130 名	141 名
参加学生数	11 名	15 名	26 名
学費補助	① 11 名	② 15 名	26 名
渡航費補助	0 名	0 名	0 名
宿泊費補助	① 11 名	0 名	11 名
チューター費	①（チューター数：15 名）	①（チューター数：9 名）	
JASSO 奨学金	③ 11 名	0 名	11 名

# 第一部

## 北京大学学生のための「京都サマースクール」

《主催》  **Kyoto University**  
The Organization for the Promotion of International Relations  
京都大学国際交流推進機構

《共催》 京都府「京都留学生おこしやす事業」

《共催》  **KUASU**  
KYOTO UNIVERSITY ASIAN STUDIES UNIT  
京都大学アジア研究教育ユニット

## 1 北京大学学生のための「京都サマースクール」

### 1.1 設立の経緯と目的

日本と中国は、歴史的・文化的に深く交流してきた大切な隣国であるとともに、経済的にも補完し合う相互依存度の高い関係を築いてきた。しかし、近年は政治的な影響から双方の国民感情は悪化の一途を辿っているといえる。北京大学学生のための「京都サマースクール」2014年度実施報告書でも触れたように、その根底には日中の人的な相互交流が十分に行われず、互いの差異への理解の乏しさ、対話の基礎となる、国を超えた個々人の信頼関係の希薄さが見え隠れする。一方で、隣国である日本に対する関心は必ずしも低いものではない。本稿の報告者らが中国のトップ大学で行った調査においても、日本留学に関心を持つ学生が一定数存在することが分かっている。しかし、彼らの多くは奨学金、学費、言葉などの問題から、最終的に日本への長期留学を選択肢から外してしまうことが多い<sup>1</sup>。こうした現状から、両国関係を永く維持・発展させるために、将来を担う中国の若い世代に少しでも日本の実像に関する理解を深めてもらいたいと考え、まずは短期受入れプログラムを実施するようになった。参加学生たちが日本への理解を深めると共に、ソーシャルネットワーキングサービス（SNS）等を通じて、周りの人々にもその情報を発信することを目指したものである。参加学生や彼らの情報に触れた学生の中から、将来、日本への長期留学を志す学生が出てくるような循環を目指すプログラムを作っていくことになったのである。

2011年に京都府に対し、短期留学生受入れ事業を京都大学と協働で行うプログラムの提案を行った。企画段階から京都府と協働するという協力体制のもと、共同実施が実現することになった。2012年8月中旬に第一回目のサマースクールを実施し、4年目となる今年度までに、合計58名の北京大学学生がサマースクールに参加した。京都府の協力により、北京大学の学生からプログラムの参加費及び授業料などは一切徴収していない。

### 1.2 「京都サマースクール」概要

#### 1.2.1 プログラム内容

本プログラムの内容は、以下の三つの部分に分けられる。

一つ目は、京都大学での講義である。本プログラムでは、日本語を教える講義を行わない。毎年講義している教員は変わるが、基本的に経済・経営、歴史、文学、農学など、各学部の教員に専門の講義してもらっている。講義で用いられる言語は英語、中国語、日本語など講師によって異なる。日本語で行った際には、京都大学在籍の学生による通訳を付けた。2015年には、エネルギー科学研究科 マクレラン・ベンジャミンクレイグ准教授の「エネルギー問題と人類文明の持続的発展」、文学研究科 永井和教授の「東アジアの近代史を考える」、農学研究科 近藤直教授の「現代と未来の食糧・環境・生命について」、国際交流セン

---

<sup>1</sup> 韓立友・河合淳子 (2012) 「日本の大学における留学生受入れ体制の問題点及び解決策の探索：京都大学におけるアドミッション支援オフィス導入の背景と効果」『京都大学国際交流センター論攷』第2号：37-55.

ター 湯川志貴子准教授の「日本人の美意識」などの講義を提供した。また、医学研究科 濱崎洋子准教授による免疫細胞生物学研究室（湊長博研究室）の先端研究紹介を行い、研究室の見学も実施した。

二つ目は、日本文化および京都への理解を深める体験実習である。光峯錦織工房の見学、組紐資料館でのくみひも体験、宇治丸久小山園でのお茶審査室見学、茶室体験、抹茶の試飲、点て方体験、南丹地域フィールドトリップでの京野菜収穫、調理体験、美山かやぶきの里での散策やお餅つき、伏見稲荷大社見学など、府内各地域の視察や見学を行った。

三つ目は、学生交流である。京都大学からは 10 名以上の学生がサポーターとして積極的に参加した。学生たちは北京大学生とともに講義を受講し、キャンパスの案内、生活相談を行ったり、土日あるいは平日の自由活動時間に交流イベントを企画し、実施した。学生たちは、自主的にお互いのきずなを深め、プログラム終了後も SNS で交流を続けている。このプログラムは留学生に限らず、サポーターとして参加した京都大学生にとっても、異文化理解能力を養い、外国語コミュニケーション能力を高め、国際性を涵養する貴重な体験となっている。

### 1.2.2 実施体制・教員確保と京都大学学生アシスタントの関与

現段階では、国際交流推進機構の教授・准教授等の教員 4 名、国際教育交流課の事務スタッフ数名、京都府職員数名を中心として、カリキュラムの開発、企画及び実施を行っている。講義は基本的に京都大学各学部・研究科等の教員に依頼しており、謝金は出していない。また、京都大学の学生も 10 名ほどコアメンバーとして参加し、京都大学の講義及び京都府のプログラム以外に、たとえば週末を含めた自由時間にイベントを企画したり、北京大学の学生を案内したりしている。これらコアメンバーには一定の謝金を支払っている。これ以外にも 10 名ほどの学生がボランティアとして参加し、コアメンバーをサポートしている。

### 1.2.3 カリキュラムの特徴

本プログラムは、日本の政治、経済・経営、文化・伝統、歴史、社会、環境・農業・エネルギー問題などを理解してもらう以外に、海外における日本の大学のプレゼンスの向上、参加後の日本への長期留学へ繋げる足掛りとしての役割を目的としている。したがって、日本経済、歴史、文学、農学など各分野の教員による教養的講義を受けること、日本の文化を体験すること、日本人学生と交流することを特に意識したプログラム構成となっている。

### 1.2.4 使用言語

本プログラムは、参加者を広く募るため、北京大学の学生であれば誰でも応募できるよう、参加にあたって日本語能力を問わない。本プログラムにおいて京都大学が提供している講義は基本的に英語だが、講師によっては日本語と中国語による講義も含まれる。日本語で講義を行う場合、京都大学に在籍している留学生が TA として中国語への通訳を行っている。



### 1.3 今後の展望

京都が持つ日本の伝統文化・歴史、京都大学が持つ世界最先端の独創的な研究資源は、中国だけでなく、世界中の人々を惹きつける魅力がある。本プログラムのような短期留学プログラムを世界のトップ大学の学生に提供することで、日本の政治、経済、文化、歴史などについて発信できるとともに、優秀な留学生の誘致、世界における日本の大学のプレゼンスを高めることが期待できる。また、京都大学でも欧米の一部の大学と「交流協定に関する不均衡」問題が存在することから、こうしたプログラムは日本人学生の欧米への派遣を拡大し、「不均衡」を解消する対策の一つとしても考えられる。現在の対象校を拡大し、世界のトップ大学の学生を広く受け入れる必要がある。

今後の課題として、京都大学として提供する講義の講師に関する問題がある。現在は、京都大学の教育及び研究特色を生かせるよう、カリキュラムの内容によって、基本的に京都大学の各研究科・研究所の教員にボランティアで講義を依頼している。しかし今後、規模が拡大していくにつれて講師の負担が増えることが予想される。講師に対する謝金など、質の高い講義を続けていく体制の構築が急がれる。必要に応じ、一部の講義を他大学、さらには海外の教員に頼むといったケースも検討すべきである。また、運営側の教員及び職員の拡充は見込めないため、京都大学の学生アシスタントのさらなる関与が期待される。学生アシスタントに対し、一定の費用を支払う前提で、現在教職員が行っている業務を担当してもらう。具体的には、国立台湾大学が行っているように、サマースクール参加者との事前連絡（必要情報の提供、質問への回答）、空港送迎、宿舎とキャンパスの案内、歓送別会の企画・実施、文化活動等の実施、来日中の生活上のアドバイス、プログラムに対するアンケート調査の実施・統計が対象となるだろう。教職員のプログラム実施面での負担を減らすとともに、京都大学の学生の国際化、企画能力などの向上にも繋がると考えられる。

現在は北京大学の 15 名の参加者全員に申請費用や学費の免除を行っているが、今後希望者が増加すれば、講師への謝金、プログラムの企画に関与する京都大学の学生への謝金も増加する。国立台湾大学、香港中文大学で実施されているように、一定の学費免除枠外の参加希望者には学費を支払う形での参加を受け入れるということも検討に値する。学生交流の実態に基づき、参加大学毎に学費免除枠を計算したうえで、予算を超過する場合は学生に学費を要求する必要が生じることもあるだろう。

(文責：韓 立友)

## 2 実施体制

### 京都大学

#### 実施責任者

国際交流推進機構長／教授	森 純一	(MORI Junichi)
国際交流センター長／教授	榎木 哲夫	(SAWARAGI Tetsuo)

#### 担当教職員

国際交流推進機構・特任准教授	韓 立友	(HAN Liyou)
国際交流センター・准教授	家本 太郎	(IEMOTO Taro)
国際交流センター・准教授	湯川 志貴子	(YUKAWA Shikiko)
国際教育支援室・室長	森 眞理子	(MORI Mariko)
研究国際部国際教育交流課交流支援掛・掛長	横田 俊之	(YOKOTA Toshiyuki)
研究国際部国際教育交流課交流支援掛・掛員	チェン・トゥー・チャン	(TRAN Thu Trang)
研究国際部国際学生交流課企画・管理掛・掛員	宮本 康子	(MIYAMOTO Yasuko)

#### 協力教員

大学院農学研究科・教授	近藤 直	(KONDO Naoshi)
大学院文学研究科・教授	永井 和	(NAGAI Kazu)
大学院医学研究科・准教授	濱崎 洋子	(HAMAZAKI Youko)
大学院エネルギー科学研究科・准教授	マクレラン・ベンジャミンクレイグ	(MCLELLAN Benjamin-craig)

### 京都府

#### 実施責任者

知事室長	兒島 宏尚	(KOJIMA Hironao)
------	-------	------------------

#### 担当職員

知事直轄組織国際課・課長	村上 公伸	(MURAKAMI Masanobu)
知事直轄組織国際課・留学生政策担当課長	石塚 健一	(ISHIZUKA Kenichi)
知事直轄組織国際課・副課長	原田 寿樹	(HARADA Toshiki)



### 3 参加学生一覽

NAME	SCHOOL/FACULTY	STATUS
BAI XUE	School of Chinese as a Second Language	Master's
DING CHENGYI	School of Public Health	Master's
FENG DEYAO	School of Basic Medical Sciences	Undergraduate
HAN MINGYUE	Health Science Center	Undergraduate
HUANG YANGYANG	Health Science Center	Undergraduate
LIU JIANI	College of Urban and Environmental Sciences	Undergraduate
LIU SHENGPENG	School of Physics	Undergraduate
LIU SONGYIN	School of Earth and Space Science	Undergraduate
NING ANNING	Yuanpei College	Undergraduate
SHAO YANGYING	School of Foreign Languages	Master's
TAO JINZHOU	College of Environmental Science and Engineering	Master's
WANG MENGXUAN	School of Foreign Languages	Master's
WANG XING	School of Journalism and Communication	Master's
ZHANG YIYAN	School of Journalism and Communication	Undergraduate
ZHOU MINGYA	School of Basic Medical Science	Undergraduate

#### 4 研修日程

日程 Date	プログラム内容 Contents	場所 Place	担当 Responsibility
8/16 (日)	<b>12:40</b> 来日 / Arrival in Japan (CA927)	関西国際空港 Kansai International Airport	
	<b>到着後</b> ホテルへ移動、 ホテルチェックイン Hotel Check-in	京都ガーデンホテル Kyoto Garden Hotel Address: Minamiiru, Oike, Muromachi-dori, Nakagyo-ku, Kyoto City, Kyoto, Japan Phone: 075-255-2000	京都大学： 韓特任准教授 京大生（小川、西山、仲宗 根、畠山）
8/17 (月)	<b>9:30-11:00</b> オリエンテーション / Orientation 京都大学紹介 / Introduction of Kyoto University	吉田国際交流会館 南講義室5 Yoshida International House Lecture Room #5	京都大学： 森機構長、榎木センター長、 森真理子室長、家本准教授、 韓特任准教授、チャン、宮本 他 京大生（時津、山本、西山、 畠山、庄）
	<b>11:00-12:00</b> キャンパスツアー / Campus tour	吉田本部構内 Main Campus	京都大学： 京大生（中川、小川、畠山、 西山、庄、時津）
	<b>12:00-</b> 昼食 / Lunch		京都大学： 京大生（中川、小川、畠山、 西山、庄、時津）
	<b>13:30-</b> 京都府（副）知事表敬・府政等説明・旧 館見学 / Making the Courtesy visit to the Kyoto Prefectural Vice-governor at Kyoto Prefectural Government Office. （※13:30 京都府庁1号館1Fロビー集合 13:45 開始）	京都府庁 Kyoto Prefectural Office	京都府  京都大学： 韓特任准教授、チャン 京大生（西山、庄、時津）
8/18 (火)	<b>9:00-12:00</b> 京都大学での講義 / Lecture 「エネルギー問題と人類文明の持続的発展」 Energy and sustainable development	吉田国際交流会館 南講義室5 Yoshida International House Lecture Room #5	京都大学： エネルギー科学研究科 マクレラン・ベンジャミン クレイグ准教授 / Assoc. Prof. Mclellan Benjamin-craig 京大生（中川、山本、庄）
	<b>PM</b> 自由活動 / Free Time		京大生（中川、時津、小川、 山本、畠山）
8/19 (水)	<b>9:00-12:00</b> 京都大学での講義 / Lecture 「東アジアの近代史を考える」 Thoughts on Modern History of East Asia (通訳：谷雪妮 (Xueni Gu) 文学研究科D1)	吉田国際交流会館 南講義室5 Yoshida International House Lecture Room #5	京都大学： 文学研究科 永井和教授 / Prof. Nagai Kazu 京大生（小川、山本）
	<b>15:00-17:00</b> 京都大学での講義 / Lecture 「現代と未来の食糧・環境・生命について」 Current Situation and Prospects on Food, Environment, and Life in the World	吉田国際交流会館 南講義室5 Yoshida International House Lecture Room #5	京都大学： 農学研究科 近藤直教授 / Prof. Kondo Naoshi 京大生（庄、17 時以降：山 本、庄）
8/20 (木)	<b>9:30-11:30</b> 京都大学での講義 / Lecture 「日本人の美意識」 Japanese Aesthetics	吉田国際交流会館 南講義室5 Yoshida International House Lecture Room #5	京都大学： 国際交流センター 湯川志貴子 准教授 / Assoc. Prof. Yukawa Shikiko 京大生（庄）

8/20 (木)	14:00-16:00 医学研究科における最先端の研究活動紹介 および見学 / Visiting Graduate school of Medicine and Introduction of Advanced Researches	京都大学医学部D棟五階 免疫細胞生物学研究室 (湊長 博研究室)	京都大学: 医学研究科 濱崎洋子准教授 / Assoc. Prof. Hamazaki Yoko 京大生 (山本、畠山、庄17時 以降: 畠山、庄)
8/21 (金)	終日【体験プログラム / Activity】 10:00-11:30 光峯錦織工房 Koho Nishiki weaving workshop	光峯錦織工房	京都府  京都大学: チャン 京大生 (中川、時津、小川、 山本、西山、庄、畠山)
	11:50-12:50 昼食/ Lunch	同志社大学 良心館	
	13:00-14:00 くみひも体験 Kumihimo (braided cord) experience	組紐資料館	
	15:00-17:00 宇治 丸久小山園、榎島工 場見学、抹茶工場見学、お茶審査室見学、 茶室体験、抹茶の試飲、点て方体験 Matcha Factory Field trip, Tea-ceremony room experience, etc.	宇治 丸久小山園、榎島工場見 学、抹茶工場	
8/22 (土)	日中大學生交流 / Student's cultural exchange activity		(土): 京大生 (中川、時津、 山本、西山、仲宗根、畠山)
8/23 (日)			(日): 京大生 (中川、小川、 山本、西山、仲宗根、畠山)
8/24 (月)	終日【体験プログラム/ Activity】 8:00-9:40 京丹波へ移動、収穫体験 / Harvesting experience	京丹波、かやぶきの里、 たわわ朝霧	京都府  京都大学: 京大生 (西山、庄)
	10:30-12:10 丹波自然運動公園へ移動、 調理体験 / Cooking experience at Tanba Sports Park's barbecue site		
	12:10-13:30 昼食 / Lunch ※弁当 700円~自己負担。現地にて現金で支払		
	13:30-14:30 かやぶきの里ツアー、もち つき体験 / Kayabuki-no-sato Tour, Mochi (rice-cake) pounding experience		
	15:50- たわわ朝霧見学、京都市へ Tawawa Asagiri farmers market Field trip		
8/25 (火)	AM 【体験プログラム / Activity】 伏見稲荷大社 / Visit Fushimi Inari-Taisha	伏見稲荷大社	京都府  京都大学: 京大生 (西山)
	15:00-17:00 研究内容発表等 / Final Presentation	吉田国際交流会館南講義室5 Yoshida International House Lecture Room #5	京都府  京都大学: 森機構長、森眞理子室長、湯 川准教授、家本准教授、韓特 任准教授、チャン、宮本 他
	17:00-17:30 修了式 / Completion Ceremony	吉田国際交流会館南講義室5 Yoshida International House Lecture Room #5	京大生 (中川、小川、西山、 庄)
	18:00-19:30 送別会 / Farewell Party	カンフォーラ Café Restaurant Camphora	京都府  京都大学: 森機構長、森眞理子室長、湯 川准教授、家本准教授、韓特 任准教授、チャン、宮本 他 京大生 (中川、小川、西山、 畠山、庄)

## 5 参加学生報告

### One chance in a lifetime

Bai Xue

The Japanese phrase *ichigo ichie* might be overused a little by us during this program, to the extent that it almost becomes a cliché. But looking back on those days I spent in Kyoto, I cannot find a better phrase to express my feeling. There is no doubt that I'll revisit Kyoto sometime in the future, but this 'particular gathering will never be replicated'.

This is the first time I've been to Japan. Thanks to Kyoto Prefecture and Kyoto University, I could have such a rare opportunity to experience something a traveler could never have.

First of all, it was a great honor to be able to visit the Kyoto Prefecture government and even talk to the vice governor, who is amiable and easy of approach. The visit to the old government office was also very pleasant and satisfying. Both the guide and the interpreter did a great job. I later heard that they would take strenuous effort to make sure that every detail would be perfect. The explanation was edifying as well as absorbing. For example, even now I still remember the flower acanthus, which was frequently used as a motif in interior decoration. The guide also told us what kind of *sakura* was grown in the garden. His depiction was so vivid and alluring that I almost saw what the garden would look like when those *sakura* was in full-bloom.

Another privilege we enjoyed is to attend lectures given by first-class professors of Kyoto University. The curriculum is diversified enough, which includes several areas from both science and humanities. Maybe science has been put on much more emphasis, so for me, a student who is more familiar with humanity disciplinary, it's a little challenging to play an active role in those lectures. Nevertheless, I found it a good chance to learn something I'd long been ignorant of. It's refreshing and inspiring. For instance, it deepened my understanding of sustainable development, which I had long regarded as a mere slogan. Besides, precision agriculture in Japan is such a phenomenon and Japan's high technology is simply formidable. But despite all these, my favorite lecture is the one on Japanese Aesthetics, a mesmerizing course given by Professor Yukawa Shikiko. After being exposed to some delicate and beautiful haiku and waka, we've come to understand and celebrate Japanese's sensitivity to the four seasons. I was utterly enchanted.

The following days we've began to travel around Kyoto, though we'd already went to several resorts in spare time, like the Kinkaku temple, Kiyomizu temple, Gion etc. Now we had more time to travel further. Even we went sightseeing, it's also very different from an ordinary tourist, because we had Kyoto University Students' accompany, and which made this trip a cross-cultural exchange activity. It's a shame my Japanese is not good enough for me to communicate with them, but fortunately we could talk in English and some Japanese students even speak very fluent Chinese. During these days, we've built friendship and I sincerely hope this relationship will last.

The Kyoto prefecture also prepared some very nice and diversified activities for us. We went to Koho Nishiki weaving workshop, made our own *kumihimo*; we went to Uji Matcha factory Field, tasted *matcha* and dessert made of *matcha*; we visited Japan's countryside, harvested some vegetables and cooked at Tanba Sports Park's barbecue site. The trip to Kayabuki-no-sato was a pleasant surprise. I'd never expected I could see such a nostalgic, ancient-looking scenery. It's costly and arduous to preserve the thatched-roof, but most of the villagers feel compelled to protect their ancestor's house and their culture. It was in this quaint village, we had the rice-cake pounding experience, which was full of laughter and joy.

The schedule was a little bit tight, but I think it might be the most efficient plan: within the limited time, we managed to do the most things.

Very soon, our journey in Kyoto had come to an end. The final presentation and the Farewell Party drew a satisfactory full stop for this program. I enjoyed every minute I spent in Kyoto and never will I forget this wonderful experience. Now I consider studying in Japan a favorable choice, but first of all I have to improve my Japanese.

## Peking University Summer School, Kyoto

Ding Chengyi

Thanks to Kyoto University, Kyoto Prefectural Government and Peking University, I was enabled to make my first-time trip to Japan in this summer vacation. Through the 2015 Peking University Students Kyoto Summer School Program, I have gained a real picture of Japan not restricted to the text-book descriptions but involving the society, people and culture as well. I am very satisfied with the program and I would like to share my experience of this program, Kyoto and Japan as follows.

During my stay in Kyoto University, I have taken lectures on various topics including energy and sustainable development, modern history of East Asia, food and agriculture, Japanese aesthetics and medicine. All the lectures were well-prepared and benefited me pretty much. Besides, the lecturers were enthusiastic about their own research fields and full of creativity. Among all these lectures, I was most impressed by the one from Professor Kondo Naoshi which focused on the modern technology, especially the technology on robots, applied in today's Japanese agriculture. How Japan is advanced in terms of modern agriculture has made me reflect on the current situation of farming in mainland China.

Apart from the academic parts, I really enjoyed the visits and sightseeing arranged by Kyoto Prefectural Government and those students from Kyoto University as well. The visit to Kyoto Prefectural Government and its former main building gave me an overview of local government in Japan. The trip to Koho Nishiki Textile Studio and Uji Marukyu-Koyamaen helped me a lot in understanding the nature of traditional Japanese culture and skills. A great variety of sightseeing during the free time around Kyoto proved the best experience of Japanese historical heritage. All these visits and sightseeing mentioned above have greatly increased the vividness of Japan's image in my mind. Beside, a profound friendship between students from Kyoto University and those from Peking University including me has been established. Regardless of our different cultural backgrounds and language capabilities, there are still some fundamental things in common that enable us to understand each other and to communicate smoothly.

From my perspective, Kyoto can be concluded as one of the most livable cities around the world. Kyoto has neat streets, quite residences, delicious food and friendly people. More importantly, Kyoto is a city which is very human-oriented. The process of developing Tomorrow Kyoto Program can be regarded as one of the direct embodiment. When making the plan, numbers of surveys were conducted among ordinary people in Kyoto to get their experience and suggestions on city planning. Also, the results of those surveys were taken into account when the plan was finally determined by the decision-makers. In addition, great emphasis has been placed on environment protection in Kyoto. For instance, most of the consumables in hotels are environmentally friendly and recycled. Compared with China, people in Japan have already got accustomed to sorting carefully before dump rubbish. Every piece of the experience I have got from the program no matter whether it is on the schedule or not has made me touch and feel a real Japan by myself.

To conclude, the experience in Kyoto will nourish me for a lifetime. I hope that in my future career, I could make certain contribution to further promote the relationship between Japan and China and help to eliminate their biases against each other to some extent. Finally, I would like to give my gratitude to all the professors and students from both Kyoto University and Peking University. Also, I would really like to thank the officers from Kyoto Prefectural Government for their efforts that made this program so informative and enjoyable.

## Peking University Summer School, Kyoto

Feng Deyao

This is actually the second time I have taken an exchange program like this to Japan. Last time was in the second year of my senior high school. This time Japan impressed me even more.

We spent the first four or five days listening to lectures given by Kyoto University professors and visiting the Kyoto prefectural government. Again I felt the hospitality and consideration of the Japanese people. Our schedule was very well arranged and we felt warmly welcomed wherever we went. In the latter part of our trip, we did many field visits and had two free days of our own on which we could travel to nearby cities. We were accompanied by students from Kyoto University and we had many interesting conversations and a great time together.

These 10 days in Japan were absolutely very fun. What's made the trip even more meaningful and wonderful, however, is that it has given me a glimpse of what Japan's really like, cast new light on my reflection about Sino-Japanese relationship and even inspired a more objective and calm attitude of viewing things.

People tend to develop certain stereotypes about a culture. For the Japanese people, it's they are polite, always on time and so on. However, it is not until I see Japan with my own eyes can I be fully convinced by any of these descriptions about the Japanese people. And this trip did prove some of these stereotypes to be wrong. For example, in China we hear that in Japan no matter how capable they are, normally Japanese women will quit their own job after they are married or have children. I discussed this issue with some Japanese students. It's indeed true that Japan still has a long way to go before it can achieve equality for women in the workplace. But people's minds are changing and things are improving. Many capable girls in Japan, like those from Tokyo and Kyoto University plan to keep working after marriage and labor. Things are also improving for women in family. In the past, fathers held the absolute authority but now mothers also have their voice. Actually, under this trend of globalization, I think certain notions of cultures around the world are evolving towards some shared values, equality for women being one important example.

There is indeed misunderstanding between China and Japan. However, some students from Kyoto University really dismissed some of my previous opinions. I was especially moved by one student's keen interest for the Chinese culture and his calm reflection on the Japanese culture. He had been studying Chinese for years and had participated in many similar exchange programs with Chinese students and made many good friends from China. However, some of his relatives don't like China, and his interest in China has caused him some tension with his own families. However, he decided that the dislike of his relatives for China is prejudiced and they don't even really know about China and did not follow their instructions. He also reflected on some of the weaknesses of the Japanese culture and through him I saw the voice of reflection of some Japanese scholars which was barely exposed in China. The disagreement between China and Japan indeed exists, but it's also important that both countries realize we should not put some prejudiced tags on each other, even though the tag may be prevailing notions in the country. Every culture is diverse, and there are always voices of calm reflection in each other. And we should never let politics get in the way of the good will between the people. I also have many friends from the U.S. but when I'm with them I never feel the kind of sincerity when I'm with my friends from Kyoto. This is not surprising, because China and Japan share common cultural roots.

After this trip, I decided to learn Japanese and hopefully I want to work in Tokyo for a year or two in the future. There are still many aspects of the Japanese culture that I don't know yet and I want to keep exploring. Also, I want to be the bridge between Japan and China and I sincerely hope the two countries can settle down the problem of history and move on to a future of understanding and friendship.



## An amazing program, an amazing experience

Han Mingyue

Japan to me was just novels of Kawabata Yasunari and Higashino Keigo, and beautiful pictures of *sakura* and Fujisan before I took part in this program. But Japanese Culture has gravitated me from middle school, so I had very high expectation towards this program and Japan did not disappoint me. In this program, I contacted not only lectures in University, but also real life, people and culture in Japan, and built precious friendship with Japanese students.

Various lectures, knowledgeable professors and great achievements in Kyoto University left me a deep impression. In the lecture of Energy and sustainable development, I learned different kinds of energy and the current condition and problems of energy, and I myself thought about what problem can occur when human produce energy which I think is very meaningful. In the lecture of Thoughts on Modern History of East Asia, I learned the modern history of Asia, especially Japan and the war between China and Japan from the perspective of Japanese, which was totally fresh to me but important in order to learn the truth of history. In the lecture of Current Situation and Prospects on Food, Environment, and Life in the World, I saw the high technology applying in agriculture like robots, and this technology is useful and can be the development goal in China. The lecture of Japanese Aesthetics gave me a general picture of beauty elements in Japan, which I met many times in the free travel. The visit to Graduate school of Medicine and the introduction of their researches showed me what the scientists is doing in Japan, and as a medical student, I could understand the hard progress to do research and thus I was admire to those professors and researchers. All in all, wonderful lectures in different areas taught me much new knowledge and guided me to think critically. Besides, the free pursuit to truth and knowledge of students and scholars also impressed me and moved me, as PKU is also famous for its academic freedom.

Although lectures were wonderful, however, I think our most important learning happened outside the classroom. Both activities arranged by Kyoto Government and our free travel. The activities like visiting weaving factory and Matcha farm let me know how Japanese protect and inherit traditional culture and skills, and made me reflect on the current condition in China. Especially in Matcha farm, they combined the traditional skill with modern technology, so that they could preserve their tradition and achieve industrialization at the same time. The vegetable farm was another example of application of high skills in agriculture. During these activities, I noticed the earnest attitude of Japanese which showed in their insistence in their job, and the pursuit of ultimate. In our free travel, I experienced the life in Japan and I was impressed by those humanity details like vending machines everywhere, indicating boards and the machine to get change on bus. Those details made me feel comfortable and convenient living in Japan.

This program may change my future study and life. Because before I came to Japan, I never thought about studying in Japan after my graduation, as most of Chinese students would like to choose USA, Europe or Australia to continue their further study. But this program made me fall in love with Kyoto and Kyoto University, with beautiful scenery and friendly people and, most importantly, the quiet environment to study and so many excellent professors. I am learning Japanese now, and I think I will take Japan as my choice if there is an opportunity to study in Japan. Except education part, Japan is also a good place to live, so I may be go to Japan again to live for a period.

This program is amazing, this experience is amazing as well. I gained a deep understanding of Japan and Japanese and Japanese culture during this program and I also built deep friendship with students in Kyoto University. I will never forget this program and continue my Japanese studying, and try to contribute to the friendship of China and Japan.

## Peking University Summer School, Kyoto

Huang Yangyang

During the ten days in Kyoto, I had carried through several enlightening lectures, ranging from energy crisis to Japanese Aesthetics and a series of observation study, including visiting the Matcha factory, experiencing Japanese tea ceremony and sightseeing Japanese picturesque countryside in Tanba.

Among the lectures I took in Kyoto University, the Modern History of East Asia was the most impressive one. Professor Nagai Kazu presented a whole picture of contemporary Asia, specifically analyzed several main genres in nowadays Japan, which had greatly deepened my understanding about the origin and tracks of Japanese social ideology. It seems the thought of pursuing peaceful and neutral status roots in a large number of civilians' mind, which struggles to balance the wild dream of some politicians the professor referred as Post-War Monroeism representatives.

Besides that, the Japanese Aesthetics lecture was indeed beneficial since it presented the insight into Japanese poetry. Though convey of aesthetic conception was partly limited in English version, it was not difficult to understand because of the similarity in symbols of aesthetic conception between the two countries.

Moreover, the lecture Current Situation and Prospects on Food, Environment, and Life in the world was absolutely inspiring owing to Professor Kondo Naoshi's cutting-end agricultural machinery inventions. It had turned my used imagination of agriculture upside down. Meanwhile, professor Kondo's concern about possible future food shortage brought by population boom prompted me thinking about the sustainable issue seriously.

When it comes to the observation study organized by Kyoto prefecture, visiting the Matcha factory and experiencing Japanese tea ceremony is one of the most interesting one, during which we not only degusted the wonderful tea, but also learned about the modernization of Japanese tea production. The Tanba trip was overwhelmed with delight as well, during which we picked up vegetables and fried the carrot tempura on our own, witnessing the wonderful scenery of Japanese countryside.

Besides attending lectures and engaging into group activities mentioned above, we still had two days off to make our own trip plan. I went to the International Manga museum the first day, where I found abundant familiar comic compositions drawn by Japanese contemporary prestigious cartoonists, such as Tezuka Osamu and Toriyama Akira. Later, I went to Kyoto cultural museum which exhibited the transition of Kyoto city from Heian Period. Since it was located nearby our hotel, the exhibition thus promptly reminded me of the fact that we were living exactly at the center of Kyoto Prefecture, literally meant that the road I had stepped on coincides with the one that the Yamahoko carriers go by every year during the Gionmatsuri.

The second day I chose to go to Nara, sightseeing the large Nara park, where we enjoyed the harmony scenery of tourists interacting cheerfully with deer. By the way, there were so many Jinja along the journey. I'd also sincerely prayed for a better future for the two countries' younger generation.

It's a precious experience to visit Kyoto, which had broadened my horizon and deepened my understanding about Japanese culture and society. I'm looking forward further understanding about this country, thus made up my mind to study Japanese seriously in order to be capable of communicating with locals. Hoping that the journey just signaled the beginning of the process.

Finally, last but not the least, I want to express my sincere thankfulness to the staff in Kyoto who had helped to arrange this program, especially to professor Han, who had felt the need to build a stronger relationship between the two countries both in academic field and private friendship among younger generation. Besides that, I want to highlight the important role students in KU played in this program. We shared every moment in Kyoto together. Thanks for your friendliness and patience all along the journey. It marks the beginning of our precious friendship. Hoping another chance to meet you again, whether in Japan or in China.



## Peking University Summer School, Kyoto

Liu Jiani

It was my great honor to be involved in this summer school program provided by Kyoto University. We received a warm welcome on the first day from professors and officers of international office of Kyoto University and Kyoto Prefecture.

Lectures offered by Kyoto University started on our second day. Topics have varied from development to history, from aesthetic to technology, from which we have learned a lot about Japanese culture and society. What interest me most among all the lectures are those about history and aesthetics. During the 3 hours, Professor Nagai Kazu showed us a new perspective to look at those important decades in the past. It is not the difference from the Chinese textbooks, but what happened in Japan during that time that impressed me most. As a Chinese student, what I used to know is only the situation in China, but Professor Nagai gave us a clear image of what it was like in Japan and East Asia, or even the whole world. I believe it's always important to look at history from a higher view point. This lecture inspired me to read further about world history in modern time. As our last class, Associate Professor Yukawa Shikiko surprised me with the Japanese beauty. She started with some pictures and textile works indicating different season. Then she showed us those traditional literature referring to those time-indicating objects. It is not only the concept and atmosphere, but also the pronunciation and flow that impressed me so much. It is quite similar to Chinese traditional poems, but with different beauty. This is why I want to learn Japanese after the lecture, to understand the subtleness of Japanese aesthetic better.

After the lecture we were also offered with a series of culture experience activities by Kyoto Prefecture, including visit to several modern workshops of traditional Japanese crafts like Koho Nishiki weaving and Matcha factory, and handwork experience like Kumihomo and harvesting vegetables. During these activities, I got to learn a lot about how do Japanese preserve traditional culture heritages, which is a weakness of China. We have so many precious crafts fading away in modern society without successors. In Japan, through cooperation between artisans, entrepreneurs, government and education systems, traditional crafts are well commercialized and preserved at the same time.

During our free time, we also learned a lot about Japan through our own observations. I was amazed by the governance of Kyoto as a historical city as a student major in urban planning and interested in historical heritages. Apart from those well-preserved historical buildings, there are few skyscrapers like Tokyo or Beijing in the city even in CBD areas. In response, the streets are relevantly narrower than those in metropolitans. So the whole scale of city offers a sense of the old time to the residents and visitors. Not only the size and height of the buildings, but also the style and material are also trying to create an environment of vintage. Above all, what amazed me most are the night scene of the city. Unlike other modern cities, there are not so many neon-light advertisement on the streets. Instead, most of the street lights and commercial lights are warm yellow, in coordination with each other and with the whole historical atmosphere.

As for governance of a modern city, I was impressed by the public security. During our free tour I lost my camera once, but with the help of the buddy from Kyoto University, I found it back easily from the police. I was told that kids were educated to hand in everything they lost to police. It is even written in law that taking anything you found in public privately is illegal and will get a penalty. But it will be yours rightful if nobody claims it after you turning it to the police after a period of time. Actually, we were also told to do so since kindergarten, but greed is human nature. Without specific and strictly practiced law to restrain, it is not easy to achieve a highly secured society like Japan.

After these 10 days of this summer school in Kyoto, I started regretting not having attended it in my sophomore or junior year. As a senior student, it is hard for me to change my original plan for master degree study. But as I wrote before, I will continue to read more about Japan and I have already registered for a Japanese lecture for the new semester in Peking University. So one day I might be able to go to Japan for doctor study or for a job. The program is a start for me to explore Japan, never the end.

## A perfect fusion of technology and history

Liu Shengpeng

It is my great honor to have taken part in this summer school in Kyoto University this summer. Although the time is limited, it has left me a deep impression and helped me to learn a lot.

I attended lectures by professors from Kyoto University and have learned a lot covering the area of Energy, Modern History of East Asia, agriculture, Japanese Aesthetics and Medicine as a student majoring in physics. The topic about 'energy and modern agriculture' left me a deep impression. Japan, as a country with narrow national territorial area, has achieved food self-sufficient and even has some export. Among all the reasons, technology is of great importance. What's more, since the natural resource is limited, Japan lays much emphasis on looking for new resource and making full use of it. And they also did a good job in it. The usage of many new resources has not only reduced the rely on import but also protected the environment.

In my spare time, I visited a lot of interesting places in Kyoto, such as Nijo Castle, Kiyomizu Temple, Ginkakuji Temple, Kyoto culture museum and so on. The perfect fusion of technology and history left me a deep impression. Japan, as a modern country with a long history, has done a perfect job in protecting history as while as developing. When walking in Kyoto, I even have a feeling of walking in the street hundreds of years ago. The modern buildings don't give me a feeling of abrupt, but make me feel like some decorations in the city. China is also fast developing in the recent decades. However, it is always at the cost of destroying historic sites as a result, some are dismantled so as to build skyscrapers, others become over-commercialized tourist destinations. It is such a pity and we do have a lot to learn from Japan in how to protect history and culture.

Furthermore, it's very kind of Kyoto University to combine academic lectures and handwork together. After having listened to the lectures about agriculture, it is very honorable to have chance to do the harvesting and cooking. The practice in the greenhouse gave me an intuitive sense of how Japan incorporate high technology into modern agriculture. We are deeply surprised when the farmer ate the spinage directly without washing it. It reminds me of how I cook meal at home. I have to wash the vegetable for several times and steep them in brine for half an hour before cooking so as to remove the pesticide residue. So this experience just help me to understand what is organic agriculture that I have just learned in the lecture better. What's more, harvesting and cooking by ourselves is a time full of fun and I do hope to experience it again.

Before this program, I did not regard Japan as a place for me to further my study or live as North America was my first choice. However now I find that Japan has many advantages. First and foremost, the public security is better when compared to North America, there is almost no need to worry about any crimes. What's more, I don't need to worry that food security or environment pollution will influence my daily life as the relevant laws are very strict and well carried out. In addition, the Japanese national character is complementary to that of the Chinese. So cooperation with Japanese in the future would be an exciting thing. Finally, I have had a brief discussion with Associate Professor Hiroshi Okuyama in department of Chemistry, Kyoto University, and his scientific research orientation is quite similar to mine.

So if I decide to further my study in Kyoto University, there is no need to adapt the laboratory. Admittedly, learning Japanese would be a challenge to me since I have no Japanese foundation. However, if I choose to go to North America to further my study, I have to adapt different culture since Chinese culture is quite different from American culture, but is similar to Japanese culture.

To sum up, taking part in this summer program is a very enjoyable experience. It changes my opinion to some extent. And I am extremely thankful to students, professors and staffs in Kyoto University and officials in Kyoto Prefecture for your warm reception and perfect work.

## Peking University Summer School, Kyoto

Liu Songyin

When I was an 8-year-old boy, I was asked to write an essay about the dream places of mine. I got an A in my composition for beautiful words and good wishes, which was about my admiration of Japan. When my parents saw it, they were extremely worried about me because they thought I was Japan-crazy. I thought there must be some misunderstanding between Chinese people and Japanese people. From then on, I have wished I could be the bridge to communicate the two countries and improve the relationship between. To fulfill my dream, I swore that I should go to Japan one day.

The trip to Kyoto University provided me the best chance to experience the difference between Chinese and Japanese cultures and understand the history better. Thanks to the careful arrangement of Kyoto University, I got access to the excellent classes about Japanese culture, literary, science research and technology. Especially, the speech about modern history of Japan has left me great impression. The speech gave me a totally different point of view toward the Second World War, and made me more objective. Only in this way can we younger generation understand each other better and create a peaceful future together. What is more, during the 10-day's stay in Kyoto, I got quite close to the Japanese buddies and gained priceless friendship with them. Because of their unselfish help, our trip in Kyoto was very successful.

The study in Kyoto University has influenced my career plan a lot. In the last party, I talked to Professor Yukawa about career choosing. I was surprised that Professor Yukawa majored in biology at first, and then transferred to Japanese literature for master degree even though she was not familiar to it very much. Professor Yukawa encouraged me to chase my dream after I told her that I want to change my major. And now, I have decided to change my major from geology to international relationship. I have to say, it was the story of Professor Yukawa that gave me the courage to challenge in a new field.

As I said in the party, Kyoto City reminds me of Chang'an, the capital of Tang Dynasty. The ancient construction and city planning, as well as the traditional handicrafts were full of ancient Chinese character, which touched me a lot and made me feel at home. The foundation of friendship between these two cities and countries is strong. We should make full use of it to build a bridge for people in the two countries getting to know each other's culture and life style better and found up strong trust. From my point of view, Japanese people know little about modern China now. So we still need to do plenty of work to introduce China and I wish I could come back to Japan again and again, not only to meet my old friends, but also make new friends with Japanese people as many as possible.

## Peking University Summer School, Kyoto

Ning Anning

In these 10 days, I had an excellent experience in Kyoto. We took some interesting and insightful lectures from professors from Kyoto University which included many critical and significant issues such as global warming, energy, modern history studies and traditional Japanese literature. The lecture about precise agriculture in Japan was very impressive because precise agriculture faces the challenge posed by increasing population all over the world. If this technology can be transferred to China, where there are millions of peasants needing high level agriculture technology and knowledge, it will make a great difference in production of global agriculture. And the visit to faculty of medicine presented the top level of medical research in Kyoto University. After lectures offered by professors, we started outdoor experience and visit. Japan is a country who is a desirable learner and put much importance on preservation of traditional techniques. The visit to the weave workshop and the braided cord workshop shown us the delicate traditional techniques which Japanese cherish a lot. Similarly, the field trip to Matcha factory also let us know the traditional culture of Japan, especially the tea culture. And the combination between traditional tea and modern food factory led to various products of Matcha which I really love. After the weekend we went to Osaka and Nara with our buddies from Kyoto University, we went to Tanba, a rural area of Kyoto prefecture, to experience rural life in Japan. The harvesting experience and later cooking were interesting and let us experience the various aspects of Japan culture and society. The visit to farmers market also presented us the real life of Japanese citizens. The last day in Kyoto consisted of visiting to Fushimi Inari-Taisha and final presentation. Visit to the shrine was my best experience in the sightseeing. The shrine reflects the old history of Japanese religious belief and the good will to harvest which is the most special characteristic of Japan culture. And the final presentation just offered us a platform to show our experience and thinking in these 10 days. Every student showed different topics about Japan in his own mind which deepened my idea about Japan society.

As the primary purpose of the summer school, learning and thinking the Japan culture is the most important issue for us students from Peking University. Two of my learning outcomes I think it's most impressive are the preservation of traditional culture and quick learning of modern technology in Japan. Although Japan started becoming a modern country since Meiji Restoration, the traditional culture is never abandoned by Japanese and preserved very well. But back to China, who is also a country with very long history and fascinating culture, there is severe damage to Chinese traditional culture which has resulted in a huge gap between traditional and modern Chinese society. Lesson from Japan can be one example for China.

And the modern technology used in various areas such as agriculture in Japan is also an outstanding point in this program. In the lecture we learnt a lot about the precise agriculture in Japan, and the later visit to Tanba rural area also present us the real material and process of Japanese agriculture such as impressive seeds bands and green house. The advanced infrastructure of rural area also gave us a great impression. The most of Chinese population is peasants who lack necessary knowledge and basic technology. The quality level of Chinese agriculture lags behind Japanese significantly. If two countries can cooperate in this area, the agriculture problem will be solved properly in the future.

Besides the lecture and visit arranged by Kyoto University and Kyoto Prefecture, we and our buddies from Kyoto University had a very nice experience in Kyoto. We went to Arashiyama and many wonderful and historical temples such as Kiyomizu-dera and Kinkaku-ji. These experiences let us understand Japan culture more deeply and closely. Also, visiting to Osaka and Nara is very exciting and interesting.

After this program, I am more interested in Japan. I decided to study Japanese in the next semester and talk with alumni who work in Japan after graduation from PKU. Because I think that Japan is still a place with full of opportunities. And the developed society and citizenship attract me. If I have a chance, I want to find a job in a consulting firm based on Japan.

## Wonderful Trip to Kyoto and Cherished Memories

Shao Yangying

Supported by both Kyoto Prefectural Government and Kyoto University, the summer program provided not only a variety of lectures concerning history, environment, agriculture, and aesthetics, but also precious opportunities of visiting and experiencing activities.

The lectures we had in Kyoto University extended our knowledge about different aspects of Japan and even the world at large. For example, in Associate Professor Mclellan Benjamin's class, we learnt some updates about energy and sustainable development, one of the challenges facing all human beings in the 21st century. Also in Professor Kondo Naoshi's lecture of Current Situation and Prospects on Food, Environment, and Life in the World, I was impressed by Japanese precision agriculture which showed the nation's pursuit for modern and better life with advanced technology despite lack of land, vegetables, and cereals. Interested in literature and traditional Japanese culture, I was glad to have learnt how to interpret and appreciate both the literal and underlying meaning of some of Japanese poetry waka and haiku. These lectures served as a window for us to exploring in-depth Japanese culture and values.

Apart from lectures in class, we had the opportunities to experience Japan in a more vivid way, namely through various extra-curricular activities. It was of great honor for us students to pay a courtesy visit to such high-profiles as the Kyoto Prefectural Vice-governor. Well-received and warmly-welcome by Vice-governor and his colleagues, we also had thought-provoking discussion. Through both Vice-governor's speech and the Q&A session, we gained a better understanding of the exchanges and cooperation between China and Japan, especially between Xi'an and Kyoto, two ancient and long-being sister cities of two countries. Also we harvested some insights from the government on Kyoto's status-quo and further development in high-tech industry, tourism, legacy protection, etc. The most exciting part of the program I've long been looking forward to came when we visited Koho Nishiki weaving workshop, experienced Kumihimo, had a Matcha factory Field trip, and learned Tea-ceremony. It was really good to explore deeper into Japanese culture through such first-hand experiences. We had a pleasant time harvesting vegetables and cooking tempura with the help of local farmers. The activity couldn't be more interesting and impressive. It gave me an intuitive sense of the agriculture in Japan. What's more, the lunch was very delicious since we made it together with the help of local farmers. Wonderful experience! Great tour with yet limited time! We also visited many shrines and prayed for better academic achievement in a local ritual way. It was cherished memories for me, especially the insights I gained from local people of different walks of life.

The first-hand experiences I harvested during the program erased many of my preoccupations about the nation and narrowed the gap between me and Japanese culture. I found myself enjoying the academic freedom of Kyoto University, convenient public facilities, delicate and healthy food, clean and tidy environment, serenity and simplicity of Kyoto city as well as the friendliness and politeness of local people. Together with personal connections, I'm sure I will come back to the city of Kyoto in the near future to either pursue my career or enjoy several-years' living. So the first thing I have made up my mind to do is to learn Japanese as soon as I come back to China.

As a translation major, I have always been aware that translation and interpreting is not just a language-based job, but rather more of a culture activity. Thus besides acquiring language proficiency, I have to look beyond the words and characters into culture and values as a whole, whether it being English-speaking countries or not. In this sense, the trip to Kyoto acts as a bridge for me to gain a better understanding of Japan, our neighbouring nation, and to broaden my horizons so that I can better interpret the world at large. In a word, it helps me a lot in both work and life.



## A wonderful experience in Kyoto and Kyoto University

Tao Jinzhou

Japan is such a wonderful country that you cannot experience all the goodness by one visit, I had been to Japan for a tour 2 years ago, but this time I'm very lucky enough to grab the chance participating into this Summer School at Kyoto and I've had a wonderful time in Japan as a short-time student.

Firstly we have taken many courses in Kyoto University, ranging from Japanese traditional aesthetic viewpoint to modern, every course was totally amazing. Among these, a course conducted by Prof. Kondo Naoshi who taught us about High-Tech robot usage in precision agriculture attract me most, it mainly concentrate on the serious problem about food shortage due to the popularity growth in Africa and Asia, and how can robots free us from large amount of simple manual repeating work. The most impressive detail about it is that the machine can inspect the rice by each single grain so that the damaged rice can be picked out and make remaining rice the best quality, I'm so touched that Japanese people did such a complex job in order to ensure food safety and protect the interests of customers. Now in China, food safety is still a heavy problem waiting to be solved, so if this wonderful technology could be introduced back to China it would be great.

Beside the time we spend in the campus of Kyoto University, I've traveled a lot of places in and near the Kyoto City such as the Ginkaku Temple, Arashiyama, Osaka-jo Castle, Arima Onsen and so on. In fact I love Japanese Onsen Culture very much, I planned to go to the Arima Onsen, which represent for the top 3 Onsens in Japan, before I arrived Japan. And with the help of many warm-hearted students of Kyoto University, I've complete my wish, the trip to Arima Onsen was totally awesome, the beautiful scene, the nature, the old-style street and also the Onsen all are my best memories this time in Japan.

And another precious thing I've got is the friendship between us and students from Kyoto University. Thanks to Kyoto University students, I could fill my traveling plan in this program, they gave us so many advice about transports, food, shopping and also the Japanese manner. Also we've discussed a lot of subject in culture differences between our 2 countries. In conclusion, we all thought that Chinese people are more interested in big things such as national politics Japan.

During the program I've found a chance to see a professor of my own research field in Kyoto University. I emailed the professor hoping for a visit to his lab and he replied me so friendly and ask me directly to his office. We discussed a lot about academic issues and also research and campus life in Kyoto University. Finally I expressed my willing to get my further doctor course in his research group, the professor said it is totally possible if applied for that after my graduation and he would welcome me to his lab since I was doing the similar research subject now. So in a word, I can only imagine if it is possible to study or do research in Japan before the summer program, but after this I think I would take a serious consideration to go to Japan for further study.

Any way I think I've gained plenty of unexpected wonderful experiences in this summer program in Kyoto and Kyoto University, I'll never forget about this trip. And finally I'd like to give my sincerely thanks to all professors, teachers, students from Kyoto University and staffs from Kyoto City who helped us and made this fantastic journey possible.

## Peking University Summer School, Kyoto

Wang Mengxuan

The 10 days spent in Kyoto is really a wonderful memory in my life. It is not just a summer program full of lectures or trips, but an experience which has left impressive mark on me and would affect me in the future.

Thanks to the organizers for such a comprehensive program, we had university lectures, government visit, site seeing, field trip and so on.

Firstly, in the aspect of academic study, we had different lectures given by professors from different departments of Kyoto University, covering Energy and sustainable development, Modern history of East Asia, Current situation and prospects on food, environment and life in the world, and Japanese Aesthetics. I was generally interested in history and Asian Aesthetics, and this time I learned a lot from Professor Nagai and Yukawa. They gave me a different view to understand the Asia modern history and the Japanese aesthetics hidden in ancient Japanese poems. Besides these, the visit to the Graduate school of Medicine and Introduction of Advanced Researches left me a deep impression on me. Although I do not know much in medicine field, the visit to the laboratory showed me a new world and the knowledge of medicine for me indeed so different and exciting.

Apart from the academic parts, the program also provided us rare chances to experience Japanese life and culture. We spent half a day visiting the Kyoto Prefectural Government Office and had a valuable chance to communicate with the government officials. It showed me the daily operation of a Japanese local government, which turned out a sharp contrast with the environment I was used to. And the day experiencing in Koho Nishiki, Matcha factory was a real grateful experience, through which we understood and even enter into Japanese culture. The harvesting experience and cooking experience in Tanba made me think about the importance of achievement and pride in work. These experiences open a door for us to know more about Japanese culture and society and broke up the stereotype and imagination about Japan before I really come here by myself. All the lectures, visits, experiences, activities gave me a chance to understand Kyoto from difference sides. I learned about not only how the Japanese government operates, but also how the researchers develop new technology; not only the traditional Japanese culture over a long history, but also how the spirit inspires countless generation of Japanese people.

Last but not least, I want to express my gratitude to Kyoto University and students in Kyoto University. Kyoto University is an ideal place for pursuing the improvement of science, which has nurtured an amazing number of Nobel Prize winners. Professor Han introduced the history and development of Kyoto University detailedly. In Professor Han's presentation about Kyoto University, he mentioned that one can't be a professor doing research and Kyoto University's president managing the overall situation of the campus at the same time. Only by doing so, can academic researches be kept serious and management be kept efficient. He also mentioned that the police are forbidden to enter the campus without permission, students and teachers vote for university's president, and so forth. From above, we can safely conclude that, just as it is said, Kyoto University is the university in Japan that possesses most liberty to do academic researches no matter what your political orientation is, and the liberty to be someone who you really want to be. I think Kyoto University is really an ideal place to do academic study. And I want to say thanks one more time to the students of Kyoto University. Every time I turned to them for help, they would try their best to settle my problem. (WANG XINGさんの報告書内容と重複している。本件について、北京大学側を通じて、学生に嚴重な注意・指導を行った) They are really very kind and have a high degree of responsibility. They showed me the respectful image of young people in Japan. We could talk about all kinds of topics with our true heart. Even if we had been together for just ten days, it felt like we were life-long friends or families. It was too hard to say goodbye, but I believe we will meet somewhere in the future.

The experience I Kyoto will nourish me for a long time, and I want to come here again and have a chance to study in Japan.

## A Wonderful Trip to Kyoto

Wang Xing

The study experience in Kyoto University was incredibly unforgettable and fruitful for me. Not only for the academic courses I took, but also for every bit I have experienced personally about this prominent university. It was very honorable for me to participate in the summer program with Kyoto University this summer. Although the duration was short, lasting for only ten days, the program itself did leave me a deep impression for the beautiful environment, respectable professors and nice friends in Kyoto University.

The reason why I chose to participate in 2015 Peking University and Kyoto University summer program is that Japan has always been the country that attracted me the most. On one hand, it is a country that is steeped in the tradition dating back to thousands years ago, but on the other hand, it is also a country that is in rapid flux of change, playing a critical role in various fields, such as fashion and high-tech field. I am especially impressed by the environment-protecting awareness of the Japanese people, and I wondered not only the roots of this environment protection awareness, but more specifically about the specific practices Japanese government and its people perform in order to protect their environment. And I managed to find the answers to the questions I had in mind during this summer program at Kyoto University.

This program was very interesting and I fell in love with Kyoto. I think that Kyoto University is also a good place for us to study in. This program gave me a new understanding of Kyoto University. We also walked and played in out of university and the whole city is very clean. Also, when I was touring around Kyoto, I found that there is a large area of green space kept in the city. It's really amazing to see how Japanese pay their respect to nature. Sometimes I wonder whether we have to develop our cities at the cost of destroying nature. China has built more new factories, more industrial plants, purchased more cars than ever before. But life quality has declined because of the worse environment and nature. In Japan, however, I see the solutions to the conflict of urban development and natural protection and the peaceful coexistence of both and how they can promote each other. As far as I am concerned, this is what China should learn from Japan on its way to achieve economic growth while creating a sustainable environment.

In Professor Han's presentation about Kyoto University, he mentioned that one can't be as a professor doing research and Kyoto University's president managing the overall situation of the campus at the same time. Only be doing so can academic researches be kept serious and management be kept efficient. He also mentioned that the police are forbidden to enter the campus without permission, students and teachers vote for university's president, and so forth. From above, we can safely conclude that, just as it is said, Kyoto University is the university in Japan that possesses most liberty, including the liberty to express your own feelings and thoughts, the liberty to do academic researches no matter what your political orientation is, and the liberty to be someone who you really want to be.

Besides, I want to express my gratitude to students in Kyoto University. Through their sincere help, I manage to get accustomed to my life in Kyoto every quickly. Every time I turned to them for help, they would try their best to settle my problem. (WANG MENGXUAN さんの報告書内容と重複している。本件について、北京大学側を通じて、学生に厳重な注意・指導を行った) We could talk about all kinds of topics with our true heart. Even if we had been together for just ten days, it felt like we were life-long friends or families. It was too hard to say goodbye.

This program has in many aspects broadened my views. I acquired information on different subjects, and saw shining features on different friends. I came to know that I need and could improve myself as I saw them. The warm reception the Kyoto Prefecture gave us and their welcome for us to study in Kyoto are like a strong hand that will always support me to pursue my study here, and even my life in Japan, which I was really grateful. And I will also remember the love I received from the friends of Kyoto University, be someone as nice and helpful, and wait for the time to meet again.



## Peking University Summer School, Kyoto

Zhang Yiyan

Summer School to Kyoto is the most memorable experience for me in this summer. In Kyoto, we not only attended various lectures to learn relative knowledge from different aspects, but also visit places from urban to rural areas to have a close look of Japanese society in person. What's more, what I appreciate the most is the time I shared with my new friends from Kyoto University. It was their accompany, patient explanation to Japanese culture and interactive discussions with us that made me not normal tourists, but an observer of what we saw and experienced.

The first few days spent in Kyoto was a period of class study. In the classroom of Kyoto University, we attended lectures on Energy and Sustainable Development; Thoughts on Modern History of East Asia; Current Situation and Prospects on Food, Environment, and Life in the World; and Japanese Aesthetics, delivered by professors with diverse cultural and professional background. I was surprised I would be so interested in fields that I had never exposed to like history of East Asia, agricultural automation and Japanese Haiku. On environmental class, I understood the significance of energy saving and developing; on history class, I realized that history should be critical treated instead of taking what on domestic textbook for granted; on literature class, I learned how the origin of Japanese culture be related to its natural environment-season transience, and how it resemble Chinese tradition. These classes provided me a cross-field overall view of Japan and impressed me by the earnest of the scholars we reached.

Who touched me more with earnest are those *shokunin* (職人). I especially remember the enthusiastic eyes and proud face of the elderly grandpa in Koho Nishiki weaving workshop when he talked about his diligent study to improve the weaving skills and when he showed us the ingenious weaving masterpieces. I can feel the devotion and respect of every small thing in their heart, when we experienced the Kumihimo, visited field of the Tanba farmer, or were introduced the process of Mochi production. Being amazed, I also feel shameful for this spirit is what Chinese have lost and are in high urgent to learn from Japanese.

Also, I visited a few historical spots with Kyoto University students including temples in Kyoto city, Arashiyama and Nara. There two aspects that impressed me: nice protection of natural environment and ancient architectures. My hometown, Hunan province of China, was very similar to Kyoto with clear rivers and flourish forests. But recent decades witness the pollution they experienced. Thus the measures Kyoto Prefecture take to protect Kamogawa, introduced by Kyoto Prefectural Vice-governor, are really thought-provoking and worth learning. Furthermore, large quantities of temples in China have been damaged or over-commercialized, while either Buddhism or Shintoism temples are well protected and highly unified nationwide. Young generation can really learn the traditional culture and feel the sacred religiousness in these long-lasting architectures.

After this trip to Kyoto, I have a deeper and more comprehensive understanding of Japan's society and culture. Thus I would like to learn Japanese and read more about Japanese history, politics and scientific development in order to prepare for my next trip to Japan. Besides, Kyoto is a highly attractive workplace for me after this trip. Since I have been willing to do work related to international and intercultural communication, working in Kyoto in the future might be a good choice after graduation. Keeping in touch with students and teachers of Kyoto University and staffs in Kyoto Prefecture, I believe I can be well-informed about working chances.

Last but not least, I would like to express my sincerest appreciation to both Kyoto University and Kyoto Prefecture. Without effort of all the students, teachers and staffs, I could hardly see such a real and diverse Kyoto. I learnt a lot and think a lot during this trip, and hope to adapt what I got into practice in the future. Having made many friends in Japan, I believe the next meeting will be soon. Thanks again to all the people who helped us. Thanks again to this fantastic city!

## Peking University Summer School, Kyoto

Zhou Mingya

This is the third time I visit Japan but one of the most impressive and unforgettable experiences I've ever had. I was honored to have the chance to spend 10 days in this renowned historical city – Kyoto with my other Peking University friends. Just travelling with tour agency is unparallel to this experience of studying, meeting new friends and feeling the city step by step. I found it will be craved into my memory forever.

The lectures given by Kyoto university professors covered a variety of areas, which fully enriched my horizons and deepen my understanding of Japan. The Energy and sustainable development given by Associate Professor Mclellan Benjamin was a very enlightening and conclusive lecture about all sources of potential energy to be used in the future. The Thoughts on Modern History of East Asia given by Professor Nagai Kazu was an objective review of modern history focusing on Japan despite its sensitiveness. I was very interested in some points put forward by the professor like the polarized attitudes toward China inside Japanese society. The Current Situation and Prospects on Food, Environment, and Life in the World given by Professor Kondo Naoshi was the best lecture in my mind. At first I was shocked by the advanced modernization and common use of high tech in Japan agriculture. It really struck to me the detailed trace of every fruit to make sure the quality and responsibility of it. The professor was humorous but also thought-provoking by noticing us the urgency of food problems in Asia. The Japanese Aesthetics given by Associate Professor Yukawa was a pure enjoyment to lead us feeling the rich emotions and indications behind Japanese poems. Visiting Graduate school of Medicine was really attractive to me since I am a medical student. Associate Professor Hamazaki Yoko and her students gave us the introduction of their researches. The tour around the lab also made me realized the gap between China and Japan.

The activities provided by Kyoto Government were also colorful and impressive. The courtesy visit to the Kyoto Prefectural Vice-governor was enlightening as he gave us the detailed introduction about how Kyoto kept its tradition from the massive rapid wave of modernization while maintaining its energetic side as the No.1 recommended travelling spot around the world. We were also lucky to visit the Koho Nishiki weaving workshop, where I was not only astonished by the masterpiece of those fantastic weaving handiworks but also impressed by the dedication instilled from the craftsmen who have been doing it for decades only meant to me achieved the perfection. The Kumihimo experience was so fun and the bracelet made by myself was even prettier than the expensive branded bracelets in malls. Matcha Factory Field trip was also unforgettable where we actually got the chance to experience the *matcha* making process by ourselves. Tea culture is an important portion of Japan and you won't surprise to wonder how they preserve it so well when you've seen the extreme chase to perfection of that Matcha Factory. Harvesting and Cooking experience were incredibly interesting too as we worked together to cook the fresh vegetables just harvested by ourselves. This made them taste even better. Kayabuki-no-sato was breathtakingly beautiful with the blue sky and green mountains with traditional houses scattered around. This also reminded me of the upsetting fact that many villages in China couldn't be protected well and sacrificed for the economic development.

The time spent in Kyoto refreshed my impression about Japan again and it urged me more to learn Japanese to better understand the culture. I'm also interested in receiving further study in Kyoto University because of the high level of academics and the serene beauty of Kyoto city. Another thing I have to mention was the kindness showed by Kyoto University students during their accompany with us. It might be a bit difficult to communicate via English but it was never a barrier to convey our gratitude and satisfaction to each other. They were so friendly to take us around visiting everywhere and never complained a word even if we always spent long time shopping and taking photos. The best thing was definitely talking when you realized their hobbies and became better friends with them. At the end of the tour we all forged deep friendship and exchanged contacts to get further communications. I'm really looking forward to treating them well when they make their visit to Beijing next time.

Having written so much is still not enough to convey my feelings toward this unforgettable trip. I'm deeply in love with every aspect of Kyoto, the tradition, the beautiful views, the food, the friendly people. I believe there will be more chances for me to visit Kyoto again in the future and review this beautiful memory.



## 第二部

# ASEAN 諸大学学生のための 「京都で学ぶアジアと日本」研修

《主催》 京都大学国際交流推進機構国際交流センター  
The International Center, Kyoto University

《共催》  **KUASU**  
KYOTO UNIVERSITY ASIAN STUDIES UNIT  
京都大学アジア研究教育ユニット

## 1 ASEAN 諸大学学生のための「京都で学ぶアジアと日本」研修

### 1.1 設立の経緯と目的

平成 23 年度、文部科学省によって大学の世界展開力強化事業が開始されました。この事業は、A. 国際的に活躍できる人材の育成と、B. 大学教育の展開力の強化を大きな目的としており、具体的には、(1) 日本人大学生の海外留学と (2) 外国人大学生の戦略的受入にかかわる、国際的な大学間連携が支援されています。この「京都で学ぶアジアと日本」研修（以下、「本研修」）は、上記の (2) のタイプに属しているといえます。

平成 24 年度には、京都大学アジア研究教育ユニット（以下、「KUASU」）による《「開かれた ASEAN+6」による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成》が、数ある世界展開力強化事業の中の 1 つの事業として、文部科学省によって採択されました。そして、平成 25 年度から、京都大学国際交流センターと KUASU が「共催」のかたちをとり、これまでにさまざまな派遣プログラムおよび受入プログラムを実施してきました。そのうち、本研修は、国際交流センター長であった森真理子教授とアジア研究教育ユニットの佐々木幸喜特定助教によって、平成 26 年度に第一回目が実施されました。したがって、ここで報告する平成 27 年度の研修は、第二回目に実施された研修ということになります。

本研修の目的は、文部科学省による大学の世界展開力強化事業の目的に準じています。すなわち、日本と ASEAN の間で国際的に活躍できる外国人／日本人大学生の育成が、本研修の大枠における目的と言えるでしょう。これよりもさらに大きな枠でとらえるなら、本研修は ASEAN 諸大学との双方向的関係強化の一環とみなすことができます。つまり、本研修での受入と他プログラムでの ASEAN 諸大学への派遣によって蓄積される、京都大学と ASEAN 諸大学との間の相互協力の関係・実績を基に、両者のより良い国際連携を実現していく、という背景目標があります。

また、本研修を実施する目的は、KUASU が掲げる 3 つのミッション、すなわち (i) 国際的学際的協働による世界最高峰のアジア研究拠点の形成、(ii) 国際連携大学院プログラムによるグローバル人材育成、(iii) 相互理解と問題解決のための現代アジア研究の国際共通基盤構築にも準じています。とくに、本研修が目指す事柄として、(i) 世界最高基準の日本研究の統合・体系化を見据えた日本語・日本文化教育の実践、(iii) 日本—ASEAN 間でのお互いが抱える諸問題の共有・解決を見据えた共同学習の実践を挙げることができるでしょう。

### 1.2 「京都で学ぶアジアと日本」研修概要

#### 1.2.1 プログラム内容

本研修の内容／カリキュラムは、表 1 のようにまとめることができます。大きく分けて 4 つのパートから成ると考えてよいでしょう。すなわち、(A) 日本語学習、(B) 学術的文化的学習、(C) 学内外環境文化学習、(D) 共同学習の 4 つです。文化講座の「書道」における講義を (B) に分類すると、A・B・C・D の配分は 5：3：3：3 となっています。

表1 本研修のカリキュラム

分類	項目	コマ数	割合	内容
日本語学習	日本語講義	10	36%	3クラス (基礎中心、聴解中心、読解中心)
学術的 文化学習	文化講義	5	18%	歴史文化学、教育社会学、史料学、 日本古典文学、言語学
	文化講座	1	3.5%	書道の理論
学内外環境 文化学習		1	3.5%	書道の実践
		学外研修	5	18%
共同学習	学生交流・討議	6	21%	言語交換、文化紹介、発表準備、発表
計		28	100%	

1.1 節でも言及しましたが、本研修は国際的に活躍できる外国人／日本人大学生の育成を目的とし、《本研修による受入 — 日本人大学生の海外派遣》という、ASEAN 諸大学との国際連携の一環として、表1 にしめした「共同学習：学生交流・討議」をとり入れています。

表2 本研修の科目名および担当者所属／協力団体名

分類	科目名		所属／団体名
日本語学習	日本語講義	日本語Ⅰ	京都大学
		日本語Ⅱ	
		日本語Ⅲ	
学術的 文化学習	文化講義	“History and culture of Kyoto”	京都大学
		「学校教育にみる日本文化の諸相」	
		「簡単！古文書入門」	日本習字教育財団
		「日本古典文学にみる日本人の美意識」	京都大学
	「日本列島の言語文化」		
	文化講座	書道	大阪青凌中学校・ 高等学校
学内外環境 文化学習	学外研修	友禅染体験	丸益西村屋
		和菓子作り体験	京菓子司 総本家 よし廣
		留学生と訪ねる琵琶湖疏水記念館と 琵琶湖・沖島	京都市上下水道局 琵琶湖疏水記念館 近江八幡市沖島町
		文化財の保護	京都府立総合資料館
共同学習	学生交流・討議	言語交換・発表準備	京都大学



上の表 2 は、上記カリキュラム（表 1）について、科目名および講義等担当者の所属や協力団体の点からまとめた一覧です。

### 1.2.2 実施体制と教員確保

平成 27 年度の教務的な運営面においては、国際交流推進機構国際交流センター長の榎木哲夫教授のもと、同センターの河合淳子教授（KUASU 運営協議会委員）と、KUASU の稲垣和也特定助教が中心となって、全体のカリキュラムを企画・実施しました。また、学外研修 1 日分については、国際高等教育院副教育院長の喜多一教授と、国際交流センターの湯川志貴子准教授とともに、その企画・実施をおこないました。一方、事務的運営面では、国際教育交流課交流支援掛のドニークラーク有美掛員、KUASU 研究支援室の琴浦香代子特定職員、人間の安全保障開発連携教育ユニット支援室の沖田義孝特定職員と山原清美事務補佐員、そして、上記の学外研修については国際高等教育院共通教育教務掛の長谷川央掛長のご協力を仰ぎました。

カリキュラムの準備段階で、京都大学所属の教員を中心に本研修の講師担当の打診をおこない、教員の確保をすすめました。国際交流センター、大学院文学研究科、KUASU の教員に講義を依頼し、その結果、平成 26 年度の研修の講師担当と大きな違いは生じませんでした。平成 26 年度に依頼した講師陣を踏襲することで、円滑な教員確保ができ、昨年度の実績に基づいた講義内容の充実・洗練が可能になったと考えられます。一方、学外研修先の一つである京都府立総合資料館には、平成 26 年度同様、資料館見学依頼状を送り、講義担当を依頼しました。また、国際高等教育院との共催となった、「留学生と訪ねる琵琶湖疏水と琵琶湖・沖島」学外研修では、喜多一教授と稲垣和也特定助教が引率として同行しました。ほかの学外研修では、稲垣和也特定助教が引率を担当しました。

本研修の参加対象大学としては、ハノイ国家大学人文社会科学大学、ハノイ国家大学外国語大学、インドネシア大学、チュラーロンコーン大学、シンガポール国立大学の ASEAN 5 大学、そして、京都大学でした。上記 ASEAN 5 大学には、（1）日本学関連領域（日本学、日本文学、日本史学等）を学ぶ、（2）学士課程または修士課程に在籍する、という参加条件の学生募集を依頼していました。残念ながら、先方大学内の学生審査と時期的な問題（1.2.5 参照）から、平成 27 年度のシンガポール国立大学（担当教員：タン・レンレン准教授／日本研究学科長）からの学生参加は見送られました。ASEAN 各大学の責任者をふくめた本研修の全体的な実施体制については、以下の第 2 節を参照してください。

### 1.2.3 京都大学学生アシスタント

1.1 節でもふれたように、本研修の目的である「日本と ASEAN の間で国際的に活躍できる外国人／日本人大学生の育成」の達成のため、京都大学学生による、共同学習での互いのかかわりをはじめ、日本語学習・学術的文化的学習・学内外環境文化学習における ASEAN 諸大学学生のサポートが要求されます。それだけでなく、空港での迎え入れ、京都大学キャンパスおよび宿泊施設周辺の案内、関西圏・京都市内の交通案内、生活や修学にかかわる相談



# 京都大学とアジアと日本

## 参加者募集

### 文部科学省 大学の世界展開力強化事業 「開かれた ASEAN+6」による日本再発見－SENDを核とした国際連携人材育成」

2016年2月、京都大学国際交流推進機構国際交流センターでは、アジア研究教育ユニットとの共催で「京都で学ぶアジアと日本」研修2016」を実施します。このプログラムは、SEND双方向型教育プログラムとして企画された2週間の短期プログラムで、以下に記載する大学の学生を対象としています。

なお、参加学生に対して、学費・学外研修費免除、その他一部の補助が予定されています。短期交流学生に対しては該当する学生にはJASSO奨学金が支給されます。詳細については、下記にお問い合わせください。（Emailアドレスの\*を@に変更してください）。

#### 研修期間

2016.2.7 (Sun)  
～2.20 (Sat)

#### 募集対象大学

- ・協同学習・サポートにあたる京都大学学生約15名を募集します
- ・インドネシア大学
- ・シンガポール国立大学
- ・チュラーロンコーン大学
- ・ハノイ国家大学人文社会科学大学
- ・ハノイ国家大学外国語大学  
(上記ASEAN諸大学、各5名程度)

#### 研修内容

- ・日本語・日本文化講義の受講
- ・文化講座、文化体験
- ・学生交流、共同発表
- ・学外研修

#### 問合先

- 京都大学国際交流センター
- 河合淳子 稲垣和也
- 京都大学国際教育交流課 交流支援掛
- T E L : 075-753-5678
- E mail : asean-send.6 \* mail2.adm.kyoto-u.ac.jp



など、多岐にわたるサポートをおこなうためにも、京都大学学生の助力はなくてはならないものです。

上記の必要性から、実施体制の整備（1.2.2）と並行して、京都大学学生の募集をおこないました。前ページに、募集に用いたポスターを提示しています。募集終了後、オリエンテーションをおこない、SEND プログラムと本研修の概要の説明をはじめ、（1）教職員との、そして参加学生との連携、（2）京都大学学生としてサポートするという自覚・責任の必要性、（3）研修参加学生とチューターという二つの立ち位置を意識すること等を確認しました。その他、健康管理、安全管理、提出書類などについての説明もおこないました。

京都大学からの参加学生の一覧については、以下の3節を参照してください。

#### 1.2.4 カリキュラムの特徴

本研修では、主な教授言語として日本語を用いました。ただし、表2に挙げた、学術的文化学習においては、学術的媒介言語として英語が重要であることから、2つの講義の教授言語を英語としました。また、学外環境学習（琵琶湖）においては、京都大学から3名の留学生の参加があったこともあり（1. Crisu Alexandru-Marian [ルーマニア]、2. Magaly Isabel Campusano Cuello [チリ]、3. Kargbo Morris Kensuke Abu [グレナダ]）、そこでの教授言語は主に英語としました。ほかにも、前節1.2.3で述べた京都大学学生による各種サポートにおいては、英語が用いられる場面も少なからずあったようです。

カリキュラムの全体的な特徴は、（A）日本語学習、（B）学術的文化学習、（C）学内外環境文化学習、（D）共同学習（1.2.1節のプログラム内容を参照）が骨組みとなった、質の高い日本語・日本文化短期プログラムであるという点でしょう。そして忘れてはならないのが、国際交流センターが蓄積してきた長年の実績と、KUASUが平成24年度から蓄積してきた実績です。本研修では、これらが互いに調和し作用し合った結果、質の高い研修内容を提供できたのではないかと思います。

（A）の日本語学習においては、ASEAN 諸大学学生の多様な背景および興味／志向を考慮して、開講式後に日本語の筆記試験をおこない、3つのクラスに分けました。翌日の授業開始と同時に、全員と面談して受講相談の場をもうけ、日本語講義をご担当いただいた先生方のご意見を頂戴しつつ、クラス分けの最終決定をおこないました。

（D）の共同学習の際にも、上記クラス分けとは別のグループ分けをおこないました。最終日の発表時間が限られていることから、昨年度とは違い、各グループに一定数の京都大学学生を配置する方法をとらず、ASEAN 諸大学学生をメンバーとする以下の4グループを作りました（表3）。したがって、京都大学学生は、ASEAN 諸大学学生との共同学習を〈共同発表〉というかたちで完結させるのではなく、1.2.1節で言及した言語交換・発表準備においてサポートを続け、最終日におこなわれた各発表の聴講者（ないしコメント提供者）という役割を果たすことで共同学習を完結させました。ただし、11名のASEAN 諸大学学生を4グループに分けたため、メンバー数が2名となったグループには、京都大学学生代表として、サポートリーダーをつとめていた伊藤勇太（経済学部3年）がメンバーとして入ってくれました。

表3 共同学習における発表プログラム

<b>1. 「幼稚園」</b>	
13:00～ 13:25 (25分)	Annisa Marsyaulina Panggabean (インドネシア大学人文科学部4年) 「幼稚園の歴史」
	Syadza Muthia (インドネシア大学人文科学部3年) 「幼稚園の制度」
	Nikita Natasya (インドネシア大学人文科学部3年) 「活動内容」
(10分)	講評
<b>2. 「バレンタインと告白」</b>	
13:35～ 14:00 (25分)	Pitchaporn Praditpruek (チュラーロンコーン大学文学部2年) 「バレンタインと告白：日本」
	Nguyen Phan Huong Linh (ハノイ国家大学外国語大学東洋言語文化学部3年) 「バレンタインと告白：タイ」
	Vu Thi Kim Chi (ハノイ国家大学人文社会科学大学東洋学部3年) 「バレンタインと告白：ベトナム」
(10分)	講評
<b>3. 「ASEAN 諸国と日本の学祭の比較」</b>	
14:20～ 14:45 (25分)	Adityo Widyo Utomo (インドネシア大学人文科学部3年) 「GJUIの学祭」
	Ratthanan Khunthong (チュラーロンコーン大学文学部2年) 「チュラーロンコーン大学の学祭」
	Do Thi Hoa Ban (ハノイ国家大学外国語大学東洋言語文化学部1年) 「ハノイ国家大学の学祭」
(10分)	講評
<b>4. 「タイ、日本、インドネシアの外国語教育」</b>	
14:55～ 15:20 (25分)	Kantaporn Angsombat (チュラーロンコーン大学文学部2年) 「教育制度、タイの外国語教育カリキュラム」
	Fadilla Choirunnisa (インドネシア大学人文科学部3年) 「日本、インドネシアの外国語教育カリキュラム」
	伊藤勇太 Yuta ITO (京都大学経済学部3年) 「英語と中国語の重要性」
(10分)	講評

### 1.2.5 実施時期および期間

本研修の実施時期については、昨年度同様、京都大学での試験期間終了後、すなわち2月第二週目からの開始としました。これは、1.2.3 節で述べた京都大学学生アシスタントがサポートを充実させられるようにするためでした。さらに、国際交流センター（と KUASU）による他のプログラムの実施期間と重ならないようにするためでもありました。したがって、平成28年2月7日（日）～2月20日（土）の2週間の期間で本研修を実施することになりました。しかしながら、以下のような問題点が浮上しました。

1. 参加した ASEAN 5 大学では授業実施期間中（学期初め）であるため、参加学生は自大学の授業を欠席しなければならない
2. ベトナムの最も重要な休日である旧正月にかさなっており、ベトナムからの参加学生は旧正月を自国で過ごすことができない
3. 熱帯気候の地域から、京都では最も寒い時期、つまり気温差が最も大きい時期に来日するため、気候への順応が難しく、体調を崩しやすい

上記の問題点のうち、1. と 2. については何らかの改善を講じる必要があります。ASEAN 諸大学の年度末にあたる7月初め～8月第1週は、すべての大学において夏休み期間中です。したがって、その時期の来日ということであれば、より多くの参加者が見込めるため、上記 1. と 2. の問題を解消できるでしょう。ただし、同時期は、京都大学の学期末にあたるため、教員、学生アシスタント、教室等の確保が難しくなるという別の問題が生じます。

実施期間の週数を2週間にした理由は、（これまでの短期派遣／受入の期間に準じ）参加学生のメンタルヘルスの観点に依拠するところが大きいのですが、費用面やその他さまざまな面を総合的に考慮したうえでの決定でした。たいてい、大半の参加学生は初めて来日するので、修学・生活・観光の初体験の期間として、2週間は長すぎず短すぎず、平均的に見て適切な実施期間であるような印象を受けました。研修終了後のアンケート結果では、7割以上の参加学生が、（ほぼ）適切な研修週数であると回答していました。

### 1.3 今後の課題

前節で指摘した通り、実施の時期には問題があります。シンガポール国立大学を除く ASEAN 諸大学への募集人数は合計22名でしたが、実際の参加は11名にとどまりました。この、ASEAN 諸大学参加学生が少数になったこと、そして1.2.2 で言及した、シンガポール国立大学からの参加見送りには、時期的な問題（1.2.5 参照）が少なからず関与していると思われる。今後の改善点として最優先すべき事柄になるでしょう。

また、シンガポールを除く ASEAN 諸国の物価は、日本の物価に比べ、かなり安いのが現状です。そのため、本研修で学費や宿泊費が補助されるとはいえ、渡航費・海外旅行保険費・生活費・交通費、その他考えられるあらゆる負担によって、ASEAN 諸大学学生の参加を足踏みさせてしまっているかもしれないという点は否めません。事実、JASSO 奨学金を受給した ASEAN 諸大学学生が答えたアンケートによると、奨学金無しでも参加意思がある／あったと回答したのは全体の3割に満たず、受給した奨学金金額が（幾分）足りないという回答

したのは全体の8割以上であることが判明しました。ただし、国際交流推進機構のアンケートの回答によると、目に見える「経済的負担」を意識し、生活する中で困難を感じていた参加学生はほとんどいなかったようです。しかしながら、本研修における費用補助も、重要な問題であることは間違いありません。

(文責：稲垣和也)

## 2 実施体制

### ASEAN 諸大学

ハノイ国家大学人文社会科学大学東洋学部・講師	Võ Minh Vũ (ヴォ ミン ヴ)
ハノイ国家大学外国語大学東洋言語文化学部・講師	Lê Thị Minh Nguyệt (レ ティ ミン グェット)
インドネシア大学人文科学部・講師	Himawan Pratama (ヒマワン プラタマ)
チュラーロンコーン大学文学部・助教授	ผศ.ดร.ชมนาด สีติสาร Chomnard Setisarn (チョムナード シティサーン)

### 京都大学

#### 実施責任者

国際交流センター長・教授	榎木 哲夫 (SAWARAGI Tetsuo)
大学院文学研究科/アジア研究教育ユニット長・教授	伊藤 公雄 (ITO Kimio)

#### 担当教職員

国際高等教育院/学術情報メディアセンター 副教育院長/教授	喜多 一 (KITA Hajime)
国際交流センター・教授	河合 淳子 (KAWAI Junko)
アジア研究教育ユニット・特定助教	稲垣 和也 (INAGAKI Kazuya)
研究国際部国際教育交流課・課長	馬淵 光正 (MABUCHI Mitsumasa)
研究国際部国際教育交流課交流支援掛・掛長	横田 俊之 (YOKOTA Toshiyuki)
研究国際部国際教育交流課交流支援掛・掛員	ドニークラーク 有美 (Donny-Clark Yumi)

#### 協力教職員

国際交流センター・准教授	家本 太郎 (IEMOTO Taro)
国際交流センター・准教授	湯川 志貴子 (YUKAWA Shikiko)
国際交流センター・非常勤講師	下橋 美和 (SHIMOHASHI Miwa)
国際交流センター・非常勤講師	浦木 貴和 (URAKI Norikazu)
国際交流センター・非常勤講師	白方 佳果 (SHIRAKATA Yoshika)
白眉センター・特定助教	ニールス ファン ステンパー (Niels van Steenpaal)
アジア研究教育ユニット・特定助教	山田 真寛 (YAMADA Masahiro)
大阪青凌中学校・高等学校・非常勤講師	北山 聡佳 (KITAYAMA Satoka)
京都府立総合資料館・職員	楠 久美 (KUSUNOKI Kumi)
日本習字教育財団・契約社員	渡辺 直子 (WATANABE Naoko)

### 3 参加学生一覧

	名 前	大 学	学部・研究科	学年
1	Vũ Thị Kim Chi (チー)	ハノイ国家大学 人文社会科学大学	東洋学部	B 3
2	Nguyễn Phan Hương Linh (リン)	ハノイ国家大学 外国語大学	東洋言語文化学部	B 3
3	Đỗ Thị Hoa Ban (バン)		東洋言語文化学部	B 1
4	Adityo Widyo Utomo (ティヨ)	インドネシア大学	人文科学部	B 4
5	Annisa Marsyaulina Panggabean (アシヤ)		人文科学部	B 4
6	Fadilla Choirunnisa (ディツラ)		人文科学部	B 3
7	Nikita Natasya (ニキタ)		人文科学部	B 3
8	Syadza Muthia (シャザ)		人文科学部	B 3
9	กัญจกรณ์ แอ่งสมบัติ Kantaporn Angsombat (カナ)		チュラーロンコーン大学	文学部
10	รัฐนันท์ ขุนทอง Ratthanan Khunthong (ワーウ)	文学部		B 2
11	พิชชาพร ประดิษฐ์พฤกษ์ Pitchaporn Praditpruek (ピミー)	文学部		B 2
12	姜 天明 (きょう てんめい)	京都大学	農学研究科	M 2
13	朱 美霖 (しゅ みりん)		人間・環境学研究科	M 1
14	齋藤 英梨子 (さいとう えりこ)		農学部	B 4
15	伊藤 勇太 (いとう ゆうた)		経済学部	B 3
16	岡崎 史恵 (おかざき ふみえ)		農学部	B 3
17	加田 真央奈 (かだ まおな)		教育学部	B 3
18	牟禮 あゆみ (むれ あゆみ)		理学部	B 2
19	林 真彩 (はやし まあや)		総合人間学部	B 2
20	于 再治 (う さいじ)		工学部	B 1
21	猪飼 奈々 (いかい なな)		法学部	B 1
22	浅野 真矢 (あさの まや)		エネルギー科学 研究科	M 1
23	翁 祖耀 (おう そよう)		経営管理大学院	M 1
24	清島 優花 (きよしま ゆか)		農学部	B 3
25	吉川 健太郎 (よしかわ けんたろう)		医学部	B 1
26	押村 亜沙美 (おしむら あさみ)	農学部	B 2	



## 4 研修日程

2月7日(日) 短期交流学生入国、参加学生顔合わせ			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
6:40	到着(ベトナム:VN330便)	【アジア研究教育ユニット】 稲垣和也(いながき かずや) 助教	関西国際空港(2名)
8:15	到着(インドネシア:GA888便)		関西国際空港(5名)
16:15	到着(タイ:TZ298便)		関西国際空港(3名)
20:30	到着(ベトナム:CZ393便)		関西国際空港(1名)
随時	ゲストハウスチェックイン		ゲストハウス地球号

2月8日(月) 開講式、オリエンテーション、歓迎会、キャンパス案内			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
10:30-11:00	開講式	【国際交流センター】 河合淳子教授、家本太郎准教授、 稲垣和也助教、下橋美和講師、 浦木貴和講師、白方佳果講師 【国際教育交流課】 馬淵光正課長、横田俊之掛長、 ドニークラーク有美交流支援掛員	京都大学 (吉田キャンパス) 旧石油化学教室本館1階 KUINEP 講義室
11:00-11:50	オリエンテーション、 クラス分けテスト 物品受領確認	【アジア研究教育ユニット】 稲垣和也助教	KUINEP 講義室
12:00-13:30	歓迎会	【国際交流センター】 河合淳子教授、家本太郎准教授、 稲垣和也特定助教、下橋美和講師、 浦木貴和講師、白方佳果講師 【国際教育交流課】 馬淵光正課長、横田俊之掛長、 上村健主任、 ドニークラーク有美交流支援掛員	京都大学 (吉田南キャンパス) 吉田国際交流会館 南講義室 5/6
13:30-15:00	キャンパス案内		京都大学構内

2月9日(火) 日本語講義、言語交換、発表準備 (SEND)			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:45-10:00	日本語Ⅰ(1)	下橋美和(しもはし みわ) 講師	吉田国際交流会館 (吉田南) 南講義室2
	日本語Ⅱ(1)	浦木貴和(うらき のりかず) 講師	吉田国際交流会館 (吉田南) 南講義室3
	日本語Ⅲ(1)	白方佳果(しらかた よしか) 講師	吉田国際交流会館 (吉田南) 南講義室4
10:00-10:30	クラス分け面談	稲垣和也助教	南講義室4
10:30-12:00	日本語Ⅰ(2)	下橋美和講師	南講義室2
	日本語Ⅱ(2)	浦木貴和講師	南講義室3
	日本語Ⅲ(2)	白方佳果講師	南講義室4
13:00-14:30	言語交換・発表準備	稲垣和也助教	南講義室 5/6



2月10日(水) 日本文化講座			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:45-10:15	日本文化講座(書道)	北山聡佳(きたやま さとか) 講師	南講義室 5/6
10:30-12:00	日本文化講座(書道)	北山聡佳講師	南講義室 5/6

2月11日(木) 建国記念の日 学外研修			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:15-8:45	移動	【アジア研究教育ユニット】 稲垣和也助教	集合：大学正門前
9:00-12:00	学外研修：文化体験(友禅染体験)		丸益西村屋
13:30-14:45	学外研修：文化体験(和菓子作り)		京菓子司 総本家 よし廣

2月12日(金) 日本語講義、言語交換、特別講義			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:45-10:15	日本語Ⅰ(3)	下橋美和講師	南講義室 2
	言語交換・発表準備	稲垣和也助教	南講義室 3
	日本語Ⅲ(3)	白方佳果講師	南講義室 4
10:30-12:00	日本語Ⅰ(4)	下橋美和講師	南講義室 2
	言語交換・発表準備	稲垣和也助教	南講義室 3
	日本語Ⅲ(4)	白方佳果講師	南講義室 4
13:00-14:30	文化講義は、2月17日(水) 14:45-16:15 に延期		
14:45-16:15	文化講義(使用言語：英語) "History and culture of Kyoto"	【白眉センター】 Niels van Steenpaal 助教 (ニールス ファン ステンパール)	南講義室 3

2月13日(土)			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
終日	関西交通事情視察		京都市近郊

2月14日(日) 学外研修(京都大学国際高等教育院と共催)			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
9:00-9:20	バス移動	【国際高等教育院】 喜多一(きた はじめ) 教授	集合：大学正門前 →
9:30-10:10	学外研修(環境・文化)		琵琶湖疏水記念館
10:10-10:30	徒歩移動(散策)	【アジア研究教育ユニット】 稲垣和也助教	インクライン → 蹴上駅
10:30-12:20	バス+船移動		→ 沖島
12:20-14:15	学外研修(環境・文化)		西福寺、島内散策
14:40-16:40	バス移動		西の湖 → 大学正門前

2月15日(月) 日本語講義、文化講義			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:45-10:15	日本語Ⅰ(5)	下橋美和講師	南講義室2
	日本語Ⅱ(3)	浦木貴和講師	南講義室3
	言語交換・発表準備	稲垣和也助教	南講義室4
10:30-12:00	日本語Ⅰ(6)	下橋美和講師	南講義室2
	日本語Ⅱ(4)	浦木貴和講師	南講義室3
	言語交換・発表準備	稲垣和也助教	南講義室4
13:00-14:30	文化講義(使用言語:日本語) 「学校教育にみる日本文化の諸相」	【国際交流センター】 河合淳子(かわい じゅんこ)教授	南講義室3
14:45-16:15	文化講義(使用言語:日本語) 「簡単!古文書入門」	【日本習字教育財団】 渡辺直子(わたなべ なおこ)氏	南講義室3

2月16日(火) 日本語講義、学外研修			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:45-10:15	日本語Ⅰ(7)	下橋美和講師	南講義室2
	日本語Ⅱ(5)	浦木貴和講師	南講義室3
	日本語Ⅲ(5)	白方佳果講師	南講義室4
10:30-12:00	日本語Ⅰ(8)	下橋美和講師	南講義室2
	日本語Ⅱ(6)	浦木貴和講師	南講義室3
	日本語Ⅲ(6)	白方佳果講師	南講義室4
13:15-13:45	移動		集合:大学正門前
14:00-15:30	学外研修	【京都府立総合資料館】 楠久美(くすのき くみ)氏 【アジア研究教育ユニット】 稲垣和也助教	京都府立総合資料館

2月17日(水) 日本語講義、文化講義			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:45-10:15	日本語Ⅰ(9)	下橋美和講師	南講義室2
	日本語Ⅱ(7)	浦木貴和講師	南講義室3
	日本語Ⅲ(7)	白方佳果講師	南講義室4
10:30-12:00	日本語Ⅰ(10)	下橋美和講師	南講義室2
	日本語Ⅱ(8)	浦木貴和講師	南講義室3
	日本語Ⅲ(8)	白方佳果講師	南講義室4
13:00-14:30	文化講義(使用言語:英語) 「日本古典文学にみる日本人の美意識」	【国際交流センター】 湯川志貴子(ゆかわ しきこ)准教授	南講義室5/6
14:45-16:15	文化講義(使用言語:日本語) 「日本列島の言語文化」	【アジア研究教育ユニット】 山田真寛(やまだ まさひろ)助教	南講義室3

2月18日(木) 日本語講義、発表準備			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:45-10:15	言語交換・発表準備	稲垣和也助教	南講義室2
	日本語Ⅱ(9)	浦木貴和講師	南講義室3
	日本語Ⅲ(9)	白方佳果講師	南講義室4
10:30-12:00	言語交換・発表準備	稲垣和也助教	南講義室2
	日本語Ⅱ(10)	浦木貴和講師	南講義室3
	日本語Ⅲ(10)	白方佳果講師	南講義室4
13:00-14:00	JASSO 奨学金の受領確認 アンケート配布	稲垣和也助教	(吉田キャンパス) 多目的ホール

2月19日(金) 発表、修了式、歓送会			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:45-12:00	言語交換・発表準備	稲垣和也助教	(吉田キャンパス) KUINEP 講義室
13:00-15:30	発表、講評	【国際交流センター】 河合淳子教授、家本太郎准教授、 稲垣和也助教、浦木貴和講師	
15:45-16:15	修了式	【国際交流センター】 榎本哲夫センター長、河合淳子教授 家本太郎准教授、湯川志貴子准教授 稲垣和也助教、浦木貴和講師 【国際教育交流課】 馬淵光正課長、横田俊之掛長、 ドニークラーク有美交流支援掛員	KUINEP 講義室
16:30-18:00	歓送会	【国際交流センター】 森真理子元センター長、河合淳子教授 家本太郎准教授、稲垣和也助教、 浦木貴和講師、白方佳果講師 【国際教育交流課】 馬淵光正課長、横田俊之掛長、 ドニークラーク有美交流支援掛員	(吉田南キャンパス) 吉田国際交流会館 南講義室1(と2)
19:30-	出発(タイ: XJ611 便; フライト 00:10 (2/20))		関西国際空港へ(1名)

2月20日(土) 短期交流学生帰国(タイ、ベトナム)			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
12:00-	出発(ベトナム: NX855 便; フライト 16:30)		関西国際空港へ(1名)
19:00-	出発(タイ: D7535 便; フライト 23:55)		関西国際空港へ(2名)

2月21日(日) 短期交流学生帰国(ベトナム、インドネシア)			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
6:00-	出発(ベトナム: VN331 便; フライト 10:30)		関西国際空港へ(2名)
7:30-	出発(インドネシア: GA889 便; フライト 12:00)		関西国際空港へ(5名)



## 4.1 日本語 I

科目名 Title	日本語 I		講師 Instructor	下橋 美和 (Miwa Shimohashi)
講義室 Classroom	吉田国際交流会館 南講義室 2			
〔授業の進め方 Content of the class〕				
回	がっぴ 月日 (曜日)	しげん 時限	じゅぎょうないよう 授業内容	びこう 備考
1	2月9日	1限	誘う、断る	
2	(火)	2限	初対面の人と話す	+京大生 3名程度
3	2月12日	1限	依頼	
4	(金)	2限	メールを書く	+京大生 3名程度
5	2月15日	1限	許可を得る	
6	(月)	2限	1分スピーチ、3分スピーチ	+京大生 3名程度
7	2月16日	1限	まとまった文章を読む (1)	
8	(火)	2限	話し合う、1分/3分スピーチ (2)	+京大生 3名程度
9	2月17日	1限	まとまった文章を読む (2)	
10	(水)	2限	話し合う、1分/3分スピーチ (3)	+京大生 3名程度
〔教科書 Textbook〕 必要な資料を配布する。 参考テキスト：『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』（スリーエーネットワーク）				
〔その他の注意 Miscellaneous〕				

1限 = 8:45~10:15      2限 = 10:30~12:00

このクラスでは、教材を用いた会話練習と、京大生と一緒に「読む・書く・話す」などの活動を行いました。

会話練習では、中級レベルの会話教材を使って、学生たちがすでに知っている文法や語彙を用いて会話する練習を行いました。すでに知っている文法でも、一連の流れのある会話のなかではつまってしまうこともありましたが、練習するうちに発話がスムーズになってきました。

また、京大生と短い新聞記事を読んでそれをもとに会話する活動などの際には、双方が積極的に話をし、相互に質問しあうなどの様子が見られました。また、メールを書いたり、1分スピーチを準備したりする際には、京大生の協力のもとで作業を進めました。1分スピーチは、4度行いましたが、行うほどに慣れてきて、人前で非常にきれいに話ができるようになってきたと思います。

みなさんが、国で学んできた日本語を実際に使い、このクラスで他国や日本の学生と一緒に活動をしたことは、よい練習になったと思います。これまでにみなさんがきちんと日本語の学習を進めていたこと、そして、日本や他国に対する好奇心を持っていたことが、今回のクラスでよい練習ができた要因だったと思います。今後も、ぜひ日本語の練習を続けて、またいつか京都にいらしてください。楽しみにしています。

(下橋美和)





## 4.2 日本語Ⅱ

科目名 Title	日本語Ⅱ		講師 Instructor	浦木 貴和 (Norikazu Uraki)
講義室 Classroom	吉田国際交流会館 南講義室3			
〔授業の進め方 Content of the class〕				
かい 回	がっぴ 月日 (曜日)	じげん 時限	じゅぎょうないよう 授業内容	びこう 備考
1	2月9日	1限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本語①	
2	(火)	2限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本語②	
3	2月15日	1限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本語③	
4	(月)	2限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本語④	
5	2月16日	1限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本語⑤	
6	(火)	2限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本語⑥	
7	2月17日	1限	サイレント映画の会話を作る①	
8	(水)	2限	サイレント映画の会話を作る②	
9	2月18日	1限	サイレント映画の会話を作る③	
10	(木)	2限	サイレント映画の会話を作る④	
〔教科書 Textbook〕 映像資料を使用する予定				
〔その他の注意 Miscellaneous〕				

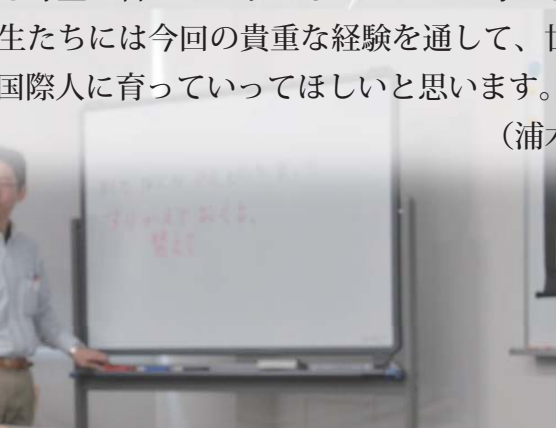
1限 = 8:45~10:15      2限 = 10:30~12:00

当研修において、わたしは日本語Ⅱのクラスを担当しました。今回はベトナム人学生 1 名とインドネシア人学生 2 名が受講してくれました。わたしのクラスでは、アニメ『サザエさん』を題材に聴き取りと文法、語彙を中心に授業を行いました。また日本の古いサイレント映画『腰弁がんばれ』（成瀬巳喜男監督）の鑑賞も行い、字幕に出てくる古い日本語の表現や、表記法の違いなどを学びました。また同時に、各国の文化や習慣の違いに目を向けてもらうことも心がけました。

授業当初は緊張もあってか聴き取れないことが目立ちましたが、日を追うにつれてかなり聴き取れるようになりました。またお正月やお駄賃などのテーマでディスカッションを行い、自国の文化や習慣との違いについて話し合ってもらいました。こちらも最初は会話が弾まないことがありましたが、後半はだいぶ打ち解けていろいろなことを話し合うことができるようになりました。これは日本人学生と一緒に、日本文化体験やスピーチ準備をする中で、自国との違いに対する感性が鋭くなったことも原因の一つだと考えられます。

外国語を学ぶということは単に文法や語彙について学習することだけに止まらず、相手のことをよく聞き理解し、文化や価値観の違いについても尊重し合えるようになることだと考えます。参加してくれた学生たちには今回の貴重な経験を通して、世界に貢献できる優れた国際人に育ってほしいと思います。

(浦木貴和)



### 4.3 日本語Ⅲ

科目名 Title	にほんごさん 日本語Ⅲ		講師 Instructor	しらかた よしか 白方 佳果 (Yoshika Shirakata)
講義室 Classroom	よしだこくさいこうりゅうかいかん みなみこうぎしつよん 吉田国際交流会館 南講義室4			
〔授業の進め方 Content of the class〕				
かい 回	がつび ようび 月日 (曜日)	じげん 時限	じゆぎょうないよう 授業内容	びこう 備考
1	2月9日 (火)	1限	きやうと かん 京都に関するエッセイを読む (1)	
2		2限	京都に関するエッセイを読む (2)	
3	2月12日 (金)	1限	きやうと ぶたい 京都を舞台にした文学作品を読む (1)	
4		2限	京都を舞台にした文学作品を読む (2)	
5	2月16日 (火)	1限	京都を舞台にした文学作品を読む (3)	
6		2限	京都を舞台にした文学作品を読む (4)	
7	2月17日 (水)	1限	けいけんもんだい しんぶん きじ 京都の景観問題に関する新聞記事などを読む (1)	
8		2限	京都の景観問題に関する新聞記事などを読む (2)	
9	2月18日 (木)	1限	きやうだいせい にゅうしもんたい ちやうせん 京大生と入試問題に挑戦する (1)	京大生 3名程度
10		2限	京大生と入試問題に挑戦する (2)	
〔教科書 Textbook〕 必要な資料を配布する。				
〔その他の注意 Miscellaneous〕				

1限 = 8:45~10:15      2限 = 10:30~12:00



この授業では、おもに京都に関する、様々な日本語の文章を扱いました。一日目は日本人の京都観が読み取れるエッセイ、二・三日目は京都を舞台にした川端康成の小説『古都』、四日目は京都の「景観」に関する新聞記事、五日目は京都大学の入試で取り上げられたこともある、都市の歴史と景観の問題を扱ったエッセイを読みました。いずれもやや難しい文章でしたが、参加した学生たちは皆、電子辞書などを片手に真面目に取り組み、頑張っついでいてくれました。とくに五日目に扱ったエッセイは難しかったと思いますが、アシスタントとして参加してくれた京大生たちの頼もしい助けもあって、和気藹々と読解することができました。読解後に挑戦してもらった京都大学の入試問題への解答を見るに、文章の要点をきちんとおさえた理解ができていたように思います。

参加者の皆さん、五日間お疲れさまでした。皆さんがとても熱心に参加してくれたので、私も楽しく授業をすることができました。質問を受けた日本語の一人称「ぼく」の問題や、皆さんの国の「古都」の話など、皆さんと話すなかで私も色々と学ぶ事がありました。この研修で得た経験や知識をもとに、これからもさらに、日本の文学や文化、そして歴史に対する関心や理解を深めていってください。

（白方佳果）



#### 4.4 書道

科目名 Title	書道		講師 Instructor	北山 聡佳 (Satoka Kitayama)
講義室 Classroom	吉田国際交流会館 南講義室5/6			
〔授業の進め方 Content of the class〕				
回数 かい	月日 (曜日) がつび ようび	時限 じげん	授業内容 じゅぎょうないよう	備考 びこう
1	2月10日 (木)	1 限	「書道について」 文字や書道芸術の歴史について学ぶ	終わり次第、作品 制作に取りかかる
2		2 限	「作品制作」 書道の作品を実際に制作する	用具用材についても 簡単に学ぶ
〔教科書 Textbook〕 必要な資料を適宜提示する				
〔その他の注意 Miscellaneous〕 墨などで汚れてもよい服装 (エプロンなど) で参加する ウエットティッシュまたは濡れタオル (おしぼり) があることが望ましい				

1 限 = 8:45~10:15

2 限 = 10:30~12:00



私はこの度のプログラムにおいて、書道の授業を担当しました。書道といっても実作だけではなく、まず日本の文字の起源を知ってもらおうと、中国での文字の発生から紹介しました。漢字の各書体の解説では、議論が白熱し、古代の人たちの感覚や文化に触れながら、文字の変遷を身に付けられたかと思います。

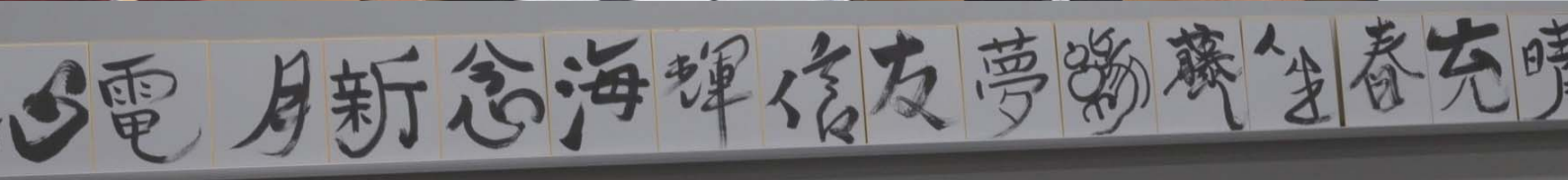
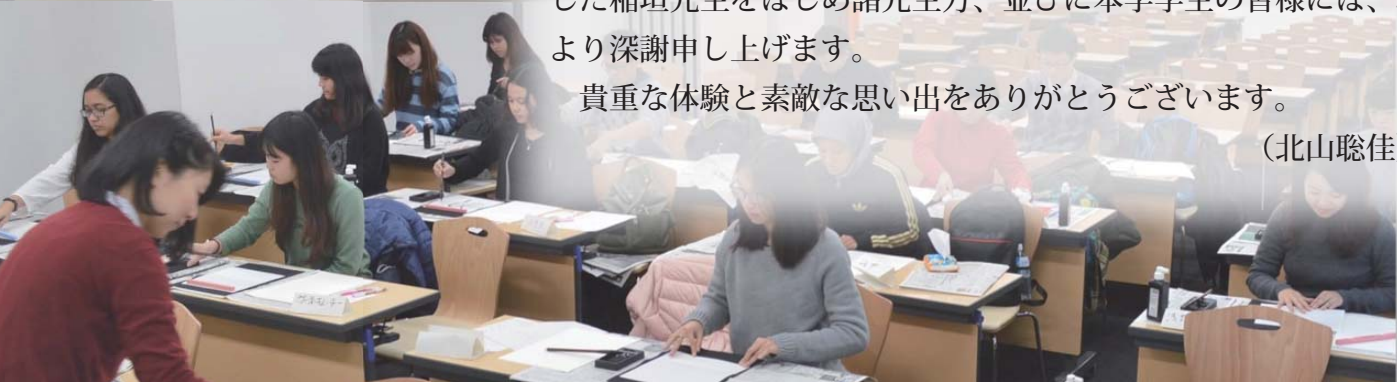
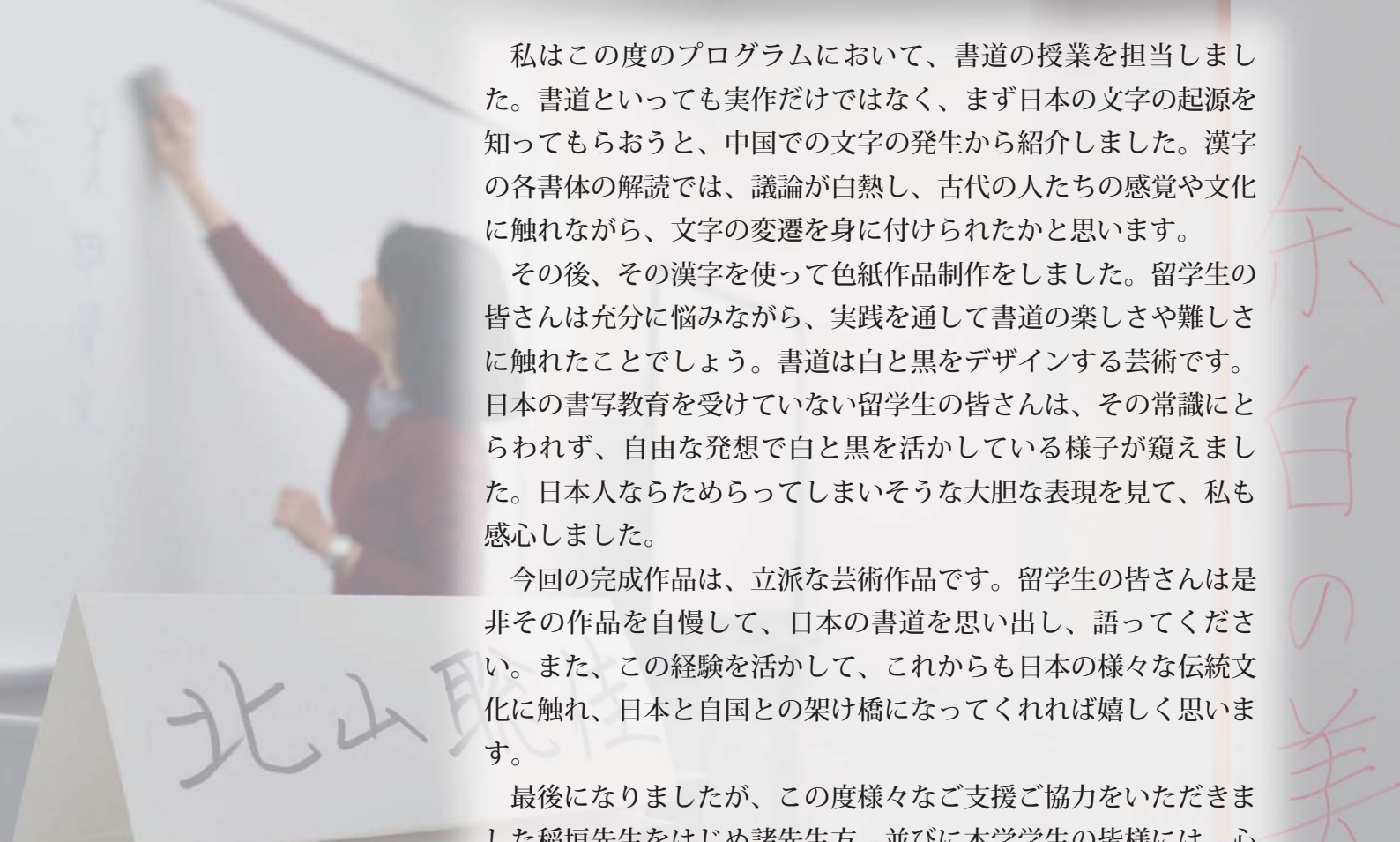
その後、その漢字を使って色紙作品制作をしました。留学生の皆さんは十分に悩みながら、実践を通して書道の楽しさや難しさに触れたことでしょう。書道は白と黒をデザインする芸術です。日本の書写教育を受けていない留学生の皆さんは、その常識にとらわれず、自由な発想で白と黒を活かしている様子が窺えました。日本人ならためらってしまいそうな大胆な表現を見て、私も感心しました。

今回の完成作品は、立派な芸術作品です。留学生の皆さんは是非その作品を自慢して、日本の書道を思い出し、語ってください。また、この経験を活かして、これからも日本の様々な伝統文化に触れ、日本と自国との架け橋になってくれれば嬉しく思います。

最後になりましたが、この度様々ご支援ご協力をいただきました稲垣先生をはじめ諸先生方、並びに本学学生の皆様には、心より深謝申し上げます。

貴重な体験と素敵な思い出をありがとうございます。

(北山聡佳)





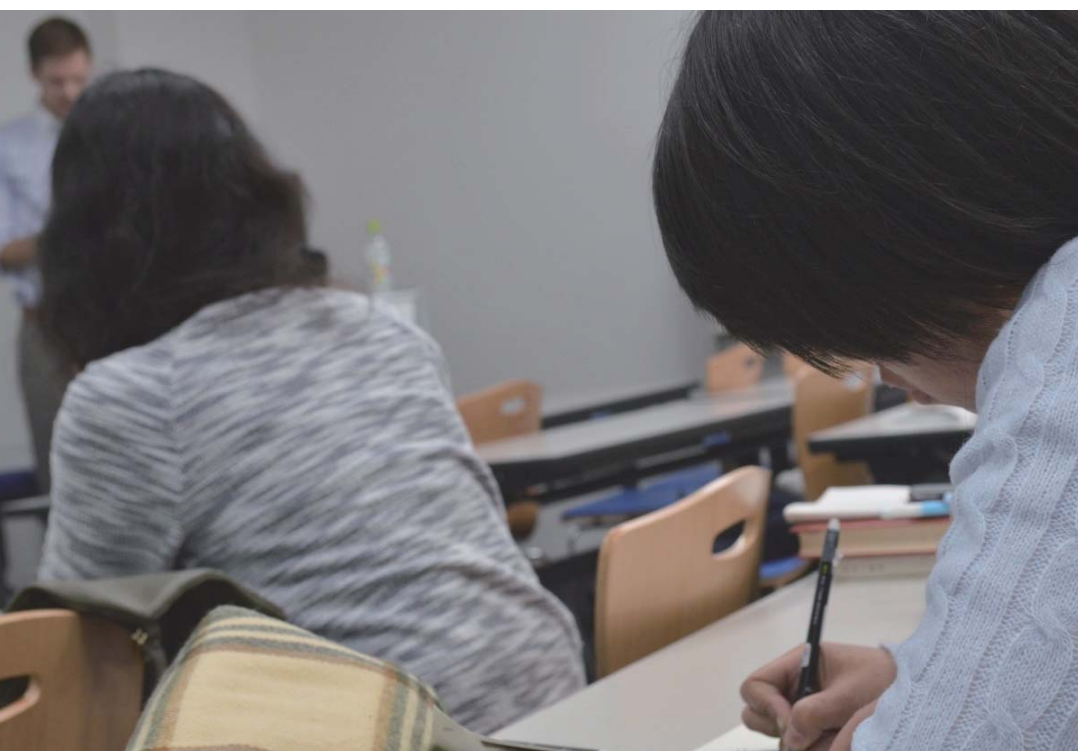
#### 4.5 文化講義 “History and culture of Kyoto”

In order to allow you to make the most out of your visit to Kyoto, this lecture aimed to provide you with the conceptual tools to appreciate these surroundings on a meta-level. That is, the goal was not to give a dry overview of the long history of the city of Kyoto, its people, architecture, or culture, but rather to offer a framework through which to understand all of these disparate elements as a whole.

The framework presented was that of “invented traditions”, a concept that highlights the many different ways in which nation states have utilized matters like clothing, food, ritual, and architecture in order to create a shared historical identity amongst its people. After explaining this concept through the examples of Shinto-style weddings, Bushido, and Sumo wrestling, we then moved on to suggest how it relates to the reimagining of the city of Kyoto in modern times.

Despite the fact that we only had limited time and that history as such might not be your specific area of interest, I nonetheless hope that the idea of invented traditions—and the skeptical approach to historical claims it represents—will be of use to you in your future studies and lives.

(Niels VAN STEENPAAL)



#### 4.6 文化講義「学校教育に見る日本文化の諸相」

皆さんと一緒に日本の教育の特徴について考えられて楽しい時間でした。

「教育」というのは誰にとっても身近な話題です。講義の中で、皆さんもそれぞれが考える教育問題について語ってくれましたね。

しかし、身近であるがゆえに、教育は分かりにくいものだという話もしました。特に、自分が受けてきた教育については、自分の一部になっていて、客観的に見つめることが難しいのです。鏡がないと自分の顔が見えないように。このことを少しでも実感してくれたのならうれしく思います。

日本で教育を受けてきた京大生の皆さんは、留学生の視点を借りながら自分の受けてきた教育を見つめ直す経験ができたでしょうか。留学生の皆さんには、日本の教育についての理解を深めると同時に、それを通して自分の受けてきた教育を考える機会になったでしょうか。これからも物事を捉える豊かな視点を身につけていってください。

(河合淳子)





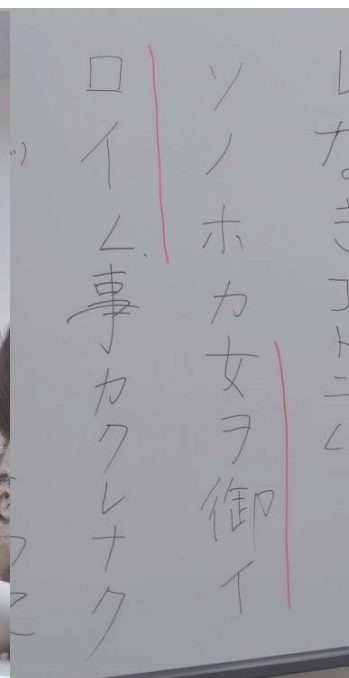
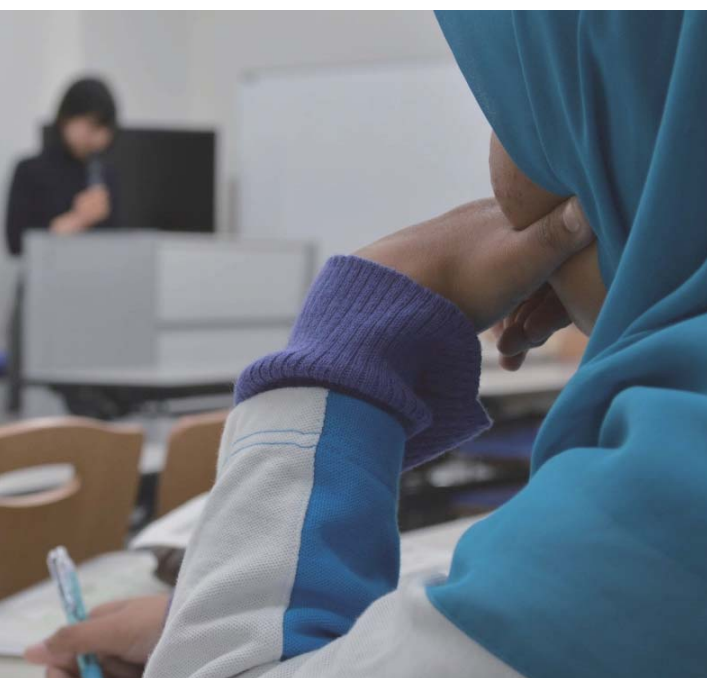
#### 4.7 文化講義「簡単！古文書入門」

古文書という、日本人でもあまりなじみのないテーマだったにもかかわらず、皆さんとても熱心に聞いてくれて、嬉しく思いました。

古文書は、現代の生活と掛け離れたもののように思ってしまうがちですが、おじいさんやおばあさん、さらにずっとずっと前の私たちのご先祖が生きて生活していた印のようなものです。その頃の人たちが、どんなことを考えてどんなふうに暮していたか、知ることができる、とてもおもしろいものです。たくさんの方が興味を持つことで、捨てられるはずだった古文書が保存され、歴史を変えるような大きな発見につながるようなこともあります。これをきっかけに自分の国の歴史や古文書にも興味を持ってくれたら、と思います。

わかりにくい話でも目をキラキラさせて聞いてくれた皆さん、これからも、自分の国のこと、日本のこと、幅広く好奇心を持って、いろんなことに挑戦して行ってほしいと思います。

(渡辺直子)





## 4.8 学外研修：文化財の保護

この学外研修では、京都にかんするさまざまな資料をどのようにあつかうべきなのか、京都府立総合資料館がどのようなとりくみをしているのかということ留学生のみなさんにお伝えし、日本語・日本文化にかんする資料のあつかいのかたについて総合的に学んでもらいました。

総合資料館は 1963 年に開館しました。本施設は図書館・文書(もんじょ)館・博物館からなりたっています。図書については、今から 400 年前の江戸時代にさかのぼるものをはじめ、多くの資料を所蔵しています。文書については、とくに 8~18 世紀の 1000 年間にわたる東寺百合文書が有名でしょう。ほかにも、公文書、絵図や写真も所蔵しています。このような総合資料館のとりくみは、大きく 3 つにわかれており、「収集・保存・提供」とまとめることができるでしょう。

紙資料の保存や整理のために、修復などのとりくみをおこなっていることも学んでもらいました。とくに、紙資料のあつかいについて詳しく見ました。和紙と洋紙の違い、酸性紙、虫の駆除、保存に適した温度・湿度、紫外線による劣化、マイクロフィルムによる保存、デジタル化による保存などです。また、資料提供に役立つようにインターネット上に検索システムをおいていることや、デジタル化をすすめている現場を見学してもらいました。現在、新館を建てている最中で、完成後はさらに良いとりくみが期待できるでしょう。

(京都府立総合資料館：楠久美)





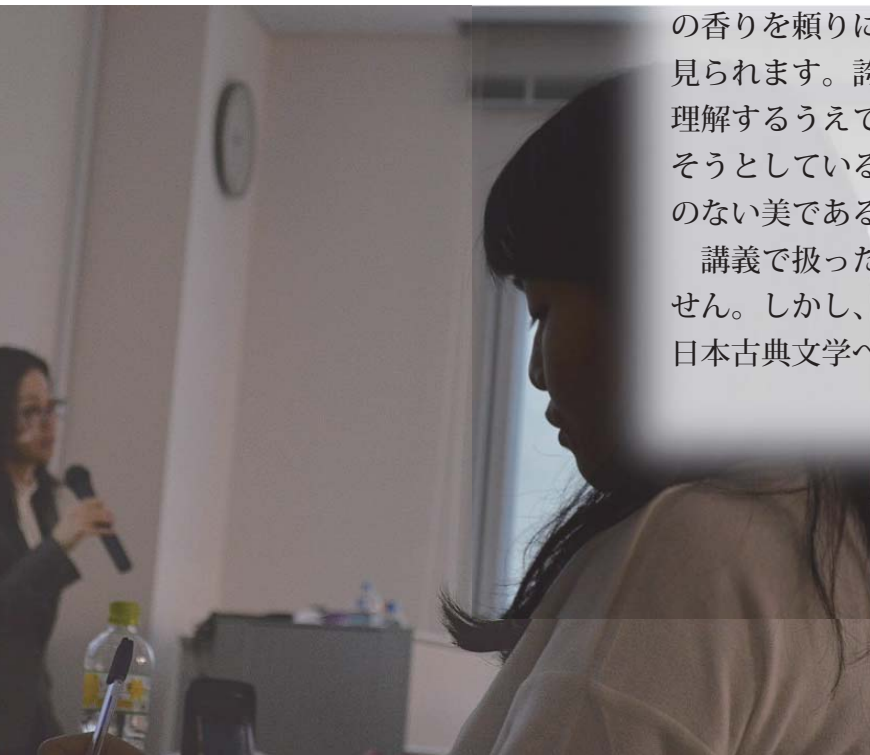
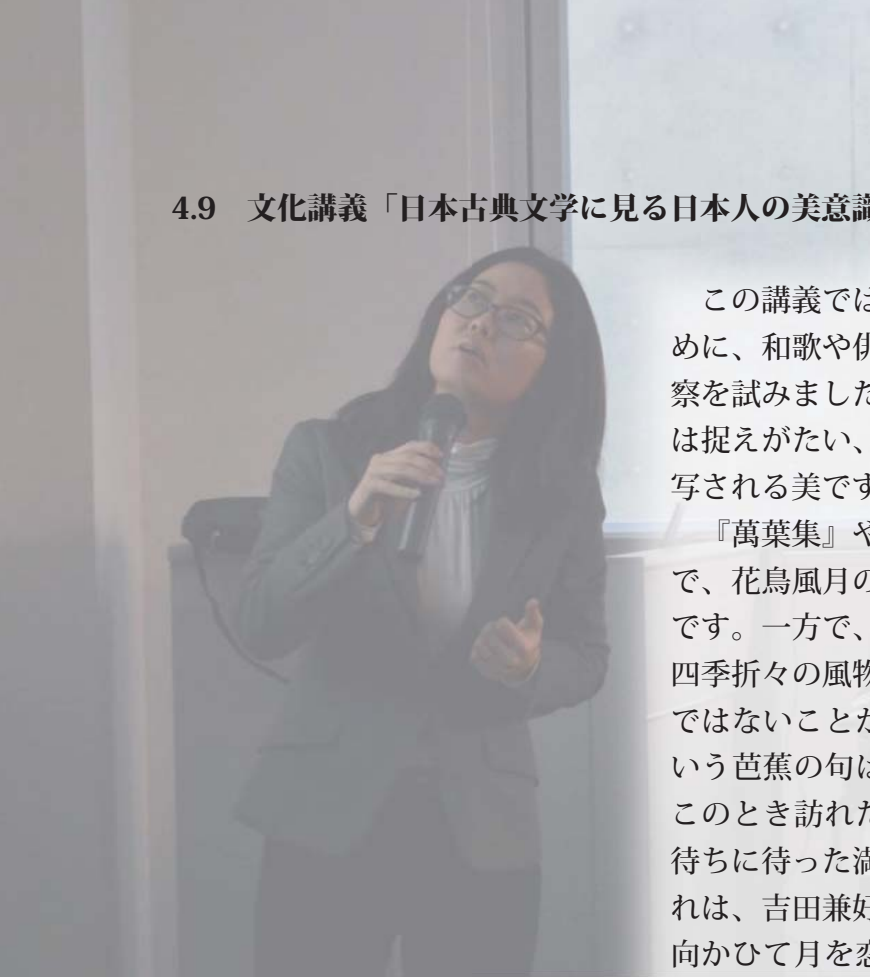
#### 4.9 文化講義「日本古典文学に見る日本人の美意識」

この講義では、日本人の古来の美的感覚への理解を深めるために、和歌や俳諧を例に取り、目に見えない美しさについて考察を試みました。具体的には、想像される美、そして、視覚では捉えがたい、嗅覚など他の感覚を頼りに確実に捉えうると描写される美です。

『萬葉集』や『古今和歌集』の和歌から芭蕉、蕪村の俳諧まで、花鳥風月の精神は代々詠み継がれてきた重要な伝統の一つです。一方で、日本の古典を紐解いてみると、必ずしも眼前の四季折々の風物をありのまま美の対象として描写しているわけではないことが分かります。「名月や 北国日和 定めなき」という芭蕉の句は、「名月や」と詠嘆しつつも、実際のところ、このとき訪れた「北国」（北陸の敦賀）では天候不順のため、待ちに待った満月が見られなかった気持ちを詠じた句です。これは、吉田兼好が「…月はくまなきをのみ見るものかは。雨に向かひて月を恋ひ…」(『徒然草』)と主張する精神と呼応するものではないでしょうか。兼好は月や花は目でばかり愛でるものであろうか、とも問いかけています。『古今和歌集』には、月が浩浩と照らす夜に、月光に紛れて見えない白梅の花は、その香りを頼りに判別できるものだと詠った凡河内躬恒の和歌が見られます。誇張した表現とは言え、兼好の唱えた美的感覚を理解するうえで分かりやすい例でしょう。ここで躬恒が描き出そうとしている美とは、視覚によって捉えられる美に劣ることのない美であることも忘れてはなりません。

講義で扱った例は、課題のほんの数例を取り上げたに過ぎません。しかし、この講義を受講したことによって、学生たちの日本古典文学への興味が深まる一契機となれば、幸甚です。

(湯川志貴子)





#### 4.10 文化講義「日本列島の言語文化」

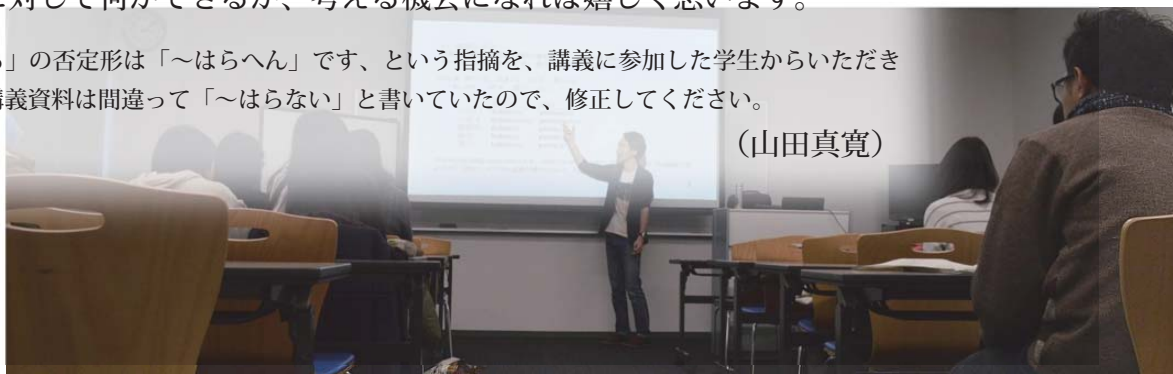
この講義では、「新しい日本語の知識を自分で獲得する方法」と「日本の中の言語の多様性」という、二つのテーマを設定して学習しました。

一つ目のテーマに関しては、京都方言で「食べはる」「飲まはる」などの表現に使われる「～はる」の文法知識を、言語学の手法を使って一緒に解明しました。今みなさんは日本語がどんどん上達しているところだと思うので、これからは授業や教科書から学ぶこと以上に、知らない日本語を自分で解明することが多くなると思い、このテーマにしました。せっかく京都にいますので、京都のことばについて少しでも知る機会になればいいな、とも思いました。

二つ目のテーマに関しては、僕がフィールド調査をしている琉球のことばなど、日本の中の消滅危機言語についてお話ししました。「～はる」を分析してわかったように、教科書で勉強する日本語共通語以外の地域言語にも、日本語共通語とは異なる文法があります。「方言」とも呼ばれますが、地域言語は共通語よりも「劣ったもの」ではありません。UNESCO の消滅危機言語の地図で紹介したように、みなさんの国にも、何もしなければ近い将来なくなってしまうかもしれない言語がたくさんあります。この講義が、母語や英語の他に日本語も身に付けたみなさんが、自分の国のそういう言語に対して何ができるか、考える機会になれば嬉しく思います。

\*「～はる」の否定形は「～はらへん」です、という指摘を、講義に参加した学生からいただきました。講義資料は間違って「～はらない」と書いていたので、修正してください。

(山田真寛)





4.11 学外研修 (友禅染、和菓子作り)



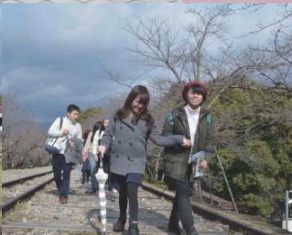
京菓子体験 終了証書  
 平成28年11月21日  
 在王水の啓命  
 あなたは京菓子作り体験に積極的に参加し、一生懸命に取り組んでくれました。この修了証書を証明します。

京菓子体験 終了証書  
 平成28年11月21日  
 在王水の啓命  
 あなたは京菓子作り体験に積極的に参加し、一生懸命に取り組んでくれました。この修了証書を証明します。



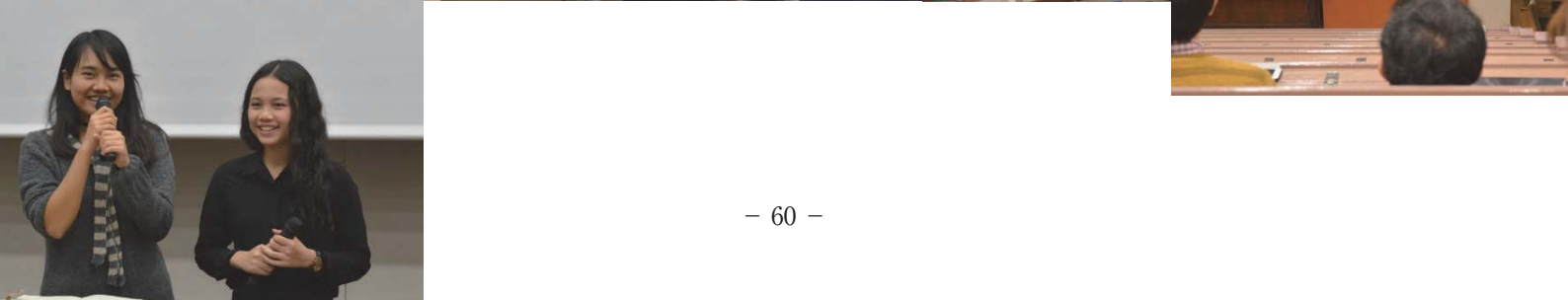


4.12 学外研修：留学生と訪ねる琵琶湖疏水と琵琶湖・沖島





# 4.13 SEND 発表



## 5 参加学生報告

### 「京都で学ぶアジアと日本」研修 2016

Vu Thi Kim Chi

日本語の授業では、日本語文法、メールの正しい書き方、日本語で新聞を読むことなどを勉強しました。今までよりも、日本語の能力が向上したと思います。これまでは、日本人に向かい合うと、何も話せませんでした。現在では、日本語を話せるようになりました。

来日して日本語を使うことが多くなり、会話をするとき、目上の人に対する表現などを使うことができるようになりました。さらに、日本語でメールを書くことができ、日本の新聞も読めるようになりました。

それ以外に、日本の電車と地下鉄を利用する体験をしました。また、発表準備のときに、日本人だけでなく留学生とも相談でき、仲良くなって、チームワークをはぐくみました。

研修プログラムでは、とくに日本語の文法の使い方を勉強しました。そして、ほかにも学外の活動にたくさん参加しました。例えば、琵琶湖の研修に行ったり、和菓子作りを体験したりしました。日本の文化と歴史についても講義を受けました。

今回「SEND プログラム」に参加して、色々な事を勉強しました。将来、日本で働きたいと思っているので、日本語の授業で学んだ日本のマナーは、将来の仕事に役立つと思いました。例えば、メールの書き方、スピーチの作り方、チームワークなどです。

今回は、初めて日本に来ました。「SEND プログラム」を通して、色々な経験をしました。このことは、自分にとって将来の計画をたてるうえで重要だと思いました。



## 「京都で学ぶアジアと日本」研修 2016

Nguyen Phan Huong Linh

日本語の授業では、聴解、すなわち聞き取り方を主に勉強しました。ハノイ国家大学での授業など、ベトナムではあまり聴解を練習してきませんでした。今回、日本語の授業を通して、聴解能力が向上したと思っています。そして、日本語らしい日本語を勉強したことで、自信を持つことができたと言えます。また、ハノイ国家大学で日本文化についても勉強していますが、日本に来て実際に見学・体験することで、理解を深めることができました。

今回は初めての海外旅行なので、プログラム期間の前半は緊張していました。日本とベトナムの間には相違点がたくさんあり、初めての経験が多かったと思います。日本で生活した2週間の中でとくに印象的だったのは、ごみの分別と、道を渡るときに横断歩道を使うということでした。また、京都大学で様々な初めての経験が出来、毎日を楽しみました。京都大学の日本人学生や他の短期交流学生と一緒に伝統的な文化を体験したりしました。京都には、お寺と神社が多いので、金閣寺と銀閣寺という世界遺産を見に行きました。とても素晴らしかった。そして、最終日の発表のためにチームを分け、私のチームにはタイからの友人がいました。発表準備のときなど、彼女たちと色々相談し、多くの異文化交流の機会が得られました。

今回のプログラムでは色々なことを学びました。2週間の期間、主に日本語の授業を受けました。もちろん、日本語だけでなく、日本文化についての講義も受けました。他には、和菓子作りの体験や、琵琶湖の見学など、多くの活動に参加しました。

ハノイ国家大学では日本語を専攻しているので、将来は日本語に関する仕事をしたいと思っています。そのため、今回のプログラムの、私にとってもっとも大きな成果は、自分の日本語能力を高めることができたということです。もう一つは、友達がたくさんでき、日本人だけでなく、インドネシア人、タイ人の友達ができただけです。それに加え、チームワークをはぐくむということも学びました。これらは、今後の私の進路を考えるうえで、良い体験だったと思っています。

## Kyoto Spring School 2016

Do Thi Hoa Ban

I acknowledge that the program is an exchange of students between two universities – Kyoto university and ULIS for the purpose of study more about relationship between ASEAN and Japan. First of all, there were plenty room for me to improve my skills of Japanese language. After having the chances to study Japanese with native speakers and after having the advantage of studying alone with a tutor, I came to have more confidence in making conversations in Japanese. Then I was able to learn more about Japanese culture which was undoubtedly interesting and useful knowledge as well. Especially, when we visited shrines and museums, I got the first-hand experiences of studying Japanese architectural structures as well as of being able to enjoy beautiful scenery of Japan. I am hoping to once again participate in this program.

After attending some classes at Kyoto university, I had a deep impression about Kyoto university – I think I am in love with the students and teachers. They taught me not to be afraid of using wrong grammar or words but to show my confidence when talking to the others. Moreover, I trained myself to be punctual and to develop the need to always build a personal plan for my actions. Since Japanese always set times for their works, in order to catch up with them, being on time is the best way to show respect to them from me. Knowing that I would return to my university soon then I felt that I had to be strict with my timelines as I might never get back these days again.

I divide the program into three main parts: studying, touring, and demonstrating. The first day I took a tour around the Kyoto university with the students, which was absolutely helpful. After that we started to learn about Japanese culture, I thought that practicing writing kanji and studying about history of Kyoto were the most interesting time. The advantage of these is that they were taught by both Japanese and English which was indeed excellent. The second part of the program consists of several tours around Kyoto. I think that Biwa lake was one of the most beautiful scenery I have ever witnessed in my life as the environment was completely clean, not to mention the background with blue sky and green mountains. After learning about Japanese and Kyoto culture, I had a chance to demonstrate my ability as the aspect of this program I enjoyed the most. Therefore, I chose Japanese festivals in ASEAN countries as the topic of my group in order to express my joyfulness with Japanese culture.

With these experiences, I feel more confident about Japanese. I have overcome the feeling of shyness when using wrong Japanese structure and grammar. My point of view on the ways of studying Japanese has changed significantly. I need to speak a lot and express myself so that I will become a fluent language user. After returning to my university, I am looking forward to becoming a Japanese teacher after I graduate. With my knowledge and experience of visiting Japan, it is my wish to help people know more about Japanese culture and language as Japan in my mind is a wonderful country. The Japanese has a long history with unique traditional culture which is worth learning and experience. On the other hand, Japan is always a grateful friend for Vietnam, I hope that I can contribute more to the nations' relationship.

## 「京都で学ぶアジアと日本」研修 2016

Adityo Widyo Utomo

このプログラムに参加することで、わたしの卒業論文のテーマにかなうさまざまな資料が得られました。わたしは、大学で日本研究を専攻しており、日本の文化・社会について卒業論文を書く予定です。そのため、卒業論文であつかう日本の文化・社会について多くのことを学ぶことができました。また、以下でも述べますが、わたしは聴解の授業を受け、日本語での会話に慣れてきました。とくに聴解の能力を向上させることができましたと思います。授業では、役に立つ表現等を学び、日常で実際に使用することができるようになりました。そして、日本文化について理解を深めることができました。とくに、日本の美意識について、さらに、京都方言を中心とした日本の言語文化についての知識を身につけることができましたと思います。

京都での経験のうち、まず、非常に洗練された京都大学附属図書館を訪れることができたのは大きな収穫でした。二つ目に、京都大学が海外からの留学生に対してどのようなコースを提供しているのか知ることができました。このことは、わたしの将来を設計するうえで、とても重要なことでした。三つ目に、有名な文化遺産、銀閣寺と金閣寺を訪れました。四つ目に、京大生の友人をたくさんつくることができたので、以前よりもすぐれた海外ネットワークを構築することができました。もっとも大きな事柄は、京都での生活体験です。わたしは体調をくずし、病院を受診しました。そして、銭湯を体験したことも大変良い思い出です。

SEND プログラム「京都で学ぶアジアと日本」研修 2016 は、大きく分けて4つのパートからなっていると考えています。一つ目は、日本語学習です。わたしは、プログラムに参加した期間、おもにリスニングのトレーニングを集中的におこないました。日本のアニメを中心として聴解の授業を受けました。また、無声映画では、日本の習慣について学ぶことができました。二つ目は、日本文化について学ぶというパートです。伝統芸能のひとつである書道について、書道の概要の講義を受け、書道の作品を制作しました。他にも文化的な講義をいくつか受講しました。とくに、教育にかんする講義が興味深いと感じました。三つ目は、古文書にみられるような古い書記方法や言語について学ぶというものでした。四つ目は、日本と ASEAN 諸国との学生間交流です。京大生と留学生（インドネシア・タイ・ベトナム）との間で日本文化について議論しました。また、ASEAN の留学生のあいだでも、各国の習慣について議論しました。

わたしは進学をかんがえています。京都大学の大学院プログラムが受けられるよう、研究を続けるつもりです。とくに、アジア・アフリカ地域研究研究科で東南アジア研究に従事したいと思っています。その後は、日本の外務省で働きたいとかんがえています。

## 「京都で学ぶアジアと日本」研修 2016

Annisa Marsyaulina Panggabean

日本に来てから、日本語での会話にどんどん慣れていき、適切な文法の使い方を学ぶとともに、実践することができました。また、実際の体験を通して文化を学ぶことは、理論的に文化を学ぶことより理解しやすかったように思います。日本で生活することで、日本人の考え方を理解することができるため、日本文化を研究する際にはおおいに役に立つと思います。

京都大学では、図書館、Wi-Fi、教室内設備などが使いやすく、たいへん便利だと感じました。教室では勉強しやすい環境が整っており、快適に学習することができました。

このプログラムでは色々なことを学びました。クラスの中で、動画を見ながら日本語を勉強したり、書道の授業で作品を制作したりしました。また、京都市の歴史と文化、学校教育にみる日本文化、日本古典から見た日本人の美意識、日本列島の言語文化等の講義を受け、学習しました。ほかにも色々なことを勉強しました。学外では、友禅染めや京菓子制作の体験、琵琶湖の歴史の勉強、古文書の保存等について学びました。

私はこのプログラムで学習した、京都のように文化を保存している伝統的な都市について研究したいと考えています。京都は、伝統的なものと現代的なものが混ざっており、有名な観光地であるというのは当たり前のことかもしれませんが。もし同様のモデルをインドネシアで実現することができれば、観光客数の増加が期待できます。そのような観光地の可能性を見つけ出したいと思います。

## 「京都で学ぶアジアと日本」研修 2016

Fadilla Choirunnisa

このプログラムに参加することで、以前よりも詳しい知識を身につけました。その知識を使う機会も多くあり、日本語の能力も増し、日本文化に対する理解も深まりました。このプログラムに参加して身につけた知識は、自分の日本語の専攻の勉強に役に立ちます。日本語の文法を深く教わっただけでなく、どうやってその文法を正しく使うのか、ということをもより理解しました。知識が増えるにつれ、日本の社会や文化や観光地のことをさらに習いたい気持ちになりました。また、このプログラムで日本人だけでなく、他の国の人のことも知ることができました。そして、プログラムの活動では、たくさんの日本の文化を体験しました。私は、日本の社会と文化と観光地に対して興味を持っているので、とてもいい経験になりました。

日本に滞在することで、文化や習慣について理解することができます。特に京都大学ではたくさんのことを体験し、勉強になりました。京都の観光地に行き、京都大学で京都の歴史や文化に対する理解を深めました。京都大学構内を京都大学の学生とともに見学し、友達になれたことも良かったと思います。京都大学は学生を支える設備がたくさんあって、とても素晴らしいと思います。京都大学生と喋ったり、一緒に観光地へ行ったり、一緒にご飯を食べたりしたとき、お互いの文化に触れる機会があり、良い体験でした。

このプログラムは SEND プログラムの一つで日本人大学生と ASEAN 諸大学生が協力して、日本について学びます。このプログラムには日本語の授業だけではなく、他の授業もあります。日本の教育、京都の歴史、文化、日本の古典文学、言語文化等の講義を受講しました。加えて、琵琶疎水記念館と琵琶湖と沖島を見学し、和菓子作りと友禅染を体験しました。

私は日本の社会や文化に興味があります。このプログラムに参加したおかげで、日本の社会や文化について理解が深まってきました。そのため、自分の専攻で進学する自信をつけたと思います。



## 「京都で学ぶアジアと日本」研修 2016

Nikita Natasya

この「京都で学ぶアジアと日本」研修 2016 に参加して、私は日本のこと、特に京都のことについて詳しい知識を身につけることができました。このプログラムは SEND プログラムの一つでした。このプログラムで、私は、日本語だけでなく、日本の、特に京都の言語や歴史や文化について学習しました。

具体的には、日本の言語文化と日本の美意識と日本の教育と京都の歴史などです。それだけでなく、日本語のクラスにおいても、エッセイと小説と新聞記事を材料に、講義を受けたので、日本語自体の学習と同時に、京都について理解を深めることができました。様々なことを学習し、様々なことを体験することで、私はさらに日本のことを勉強したいと感じました。

日本で様々な体験をさせていただきました。上述しましたが、授業で習ったことだけでなく、このプログラムで京都大学生と知り合い、ともに日本の文化、京都の観光名所、法律、日常生活等について学習することができました。学外研修では、琵琶湖と沖島へ行き、京都の周辺を見ることができ、いい体験になりました。このプログラムでは、インドネシアでは得られない多くの機会を得ることができました。

これまで、将来について具体的に考えていませんでしたが、今回のプログラムに参加することで、以前から気になっていた日本観光産業や文化について少し研究することができました。そのため、観光産業の中でも、特に航空会社関連のことをさらに勉強したいと考えています。

今回のプログラムではいろんなことを習って、いろんなことを体験しました。期間は2週間でしたが、それよりも長期間、日本で修学したいと考えています。

## 「京都で学ぶアジアと日本」研修 2016

Syadza Muthia

SEND プログラムで私が受けた授業は日本語 I です。日本語 I の授業では、基本的な日本語の会話について勉強し、実践することができました。たとえば、断り、依頼、許可などをあらかず表現の使い方です。そして、メールの書き方やスピーチのし方も教わりました。ほかに、いくつかの文化講義を受けました。それぞれの授業では、たとえば、日本の教育、京都の歴史文化、古文書の読み方などを学習しました。書道の講義もありました。さらに、学外研修では、自分で和菓子を作ることができました。琵琶湖についてよく知り、府立総合資料館で古文書について理解を深めました。中でも、発表準備は特に大事な機会でした。発表準備を進める中で、人前で話すことを練習しました。

京都では、いろいろな良い経験をしました。SEND プログラムに参加して、より正しい日本語を使えるようになりました。その中で、日本文化講義や学外研修を受け、日本についてこれまで知らなかったことをあらためて知りました。自由行動のときに、いろいろな京都の観光名所へ行って、日本の歴史について学び、いい思い出を作りました。また、京都大学の学生としゃべり、日本語の会話を練習しました。京都大学の先生方と学生はとても親切で、好印象をもちました。

日本語 I の授業をはじめとして、日本文化講座では書道、日本文化講義では、日本列島の言語文化、京都の歴史文化、学校教育の中の日本文化、古文書、古典文学と美意識などを学びました。学外研修では、友禅染体験、和菓子作り、琵琶湖疎水記念館と沖島探訪、京都府立総合資料館の見学などをおこないました。

SEND プログラムを受けた経験は、今後の進路を考えるうえで、とても役に立つと思います。私は大学の日本学科で勉強しているので、日本の言語や文化や社会などについて勉強しています。それで、このプログラムで得た知識、たとえば、日本語文法や日本文化の知識、商品（和菓子）を作る技術等は、大学での修学に応用することができると思います。今後、仕事をするとき、これらの日本で直に身につけた知識を使うこともできると思います。さらに、私は日本文学に興味があり、日本文学に対する理解を深め、研究しようと考えています。このプログラムに参加したことは、今後の研究へのモチベーションを高めました。

## First time in Kyoto

Kantaporn Angsombat

After studying Japanese-3, I have got much knowledge of various aspects of Japan. The first lesson was concerned with Kyoto and Tokyo which were the places that used to be the capital and continue to be so now. The next one was concerned with old-time and present Kyoto, and also with opinions of the famous writers in Kyoto. I studied these topics through reading the famous book named *Koto* and through watching the video version of this story too. In addition to such academic knowledge, I have also learned about other kinds of important aspects of Japan such as the environment and the old documents written in the Edo era.

This was my first time coming to Japan. I got chances to make many friends not only of Japanese but also other students from many countries in Asia. After having chances to get acquainted with many Japanese volunteer students and to stay in Japan for 2 weeks, I have learned Japanese people's way of thinking and customs about which we cannot know only through reading books.

After taking a placement test, I ended up taking Japanese-3 class. This class concentrated especially on reading skill. I tried to read various extracts from a famous book and newspapers. The contents of these sources were mostly concerned with the historical aspects of Kyoto. This class made me understand more about Kyoto, Japanese people and also many customs that may not appear nowadays. Moreover, there were many field trips during this program such as studying about Kyoto's environment at Biwa Lake and learning how to shape Japanese sweets at Yoshihiro. Therefore, what I have gained from this program was not only academic knowledge but also experiences of Japanese culture.

The moment when I could not recall some words in a conversation or when I failed to convey what I wanted to say to other people always motivated me to try harder in order to be able to convey my thoughts. If there were more chances for me to learn about Japan and Japanese language, I would come to be skillful as soon as possible. I think it is worth challenging to find a job which requires Japanese skills, such like working with a Japanese company.

## 京都でもらった想い

Ratthanan Khunthong

私が受けた日本語Ⅲのクラスでは、川端康成の「古都」という昔の京都を語る小説を読んだり、京都の景観問題に関する新聞記事などを読んで、京都の観光地の保全方針を理解することに努めました。「古都」の内容は、離れ離れになった双子姉妹が偶然に再開するというもので、二人の物語と将来の行先を語る小説です。その背景の話とともに昔の京都の有名なお祭りの様子と、その美しさを表す個所がたくさんありました。この日本語Ⅲでの「古都」を通じて、昔の京都の様々な出来事について以前よりも理解が深まりました。そして、過去のことだけでなく、現在の京都の観光地の問題も新聞記事を通じて学びました。今、世界一観光に行ってみたい、日本の伝統的なところ、すなわち京都が、どんな問題で悩んでいるのか、ということについても学習しました。クラスで授業を受けることに加え、学外研修も良い経験になりました。京都にいる二週間の中に、二回、学外研修がありました。一回目は日本の最も代表的な染色法である「友禅」コースと和菓子を作るコースで、二回目は琵琶湖と沖島を訪ねました。

勉強以外に、京都大生に京都から大阪までいろいろなところに連れて行ってもらいました。また自分でも、京都の有名かつ伝統的な観光地、例えば、金閣寺や伏見稲荷などに行き、京都の美しさを感じました。

この「SENDプログラム」は、京都大学および京都近郊において、インドネシア・ベトナム・タイの留学生が、主に日本の言語・文化の講義を受けたり、文化体験をしたりするプログラムです。各国の留学生は、日本以外にも、自国の文化や習慣について京都大学生と他国の人と情報交換をします。このことも、このプログラムの貴重な目的の一部です。

私は将来の進路についてまだ考えていませんが、京都大学で授業を受けたり、京都の観光地を訪れてみたり、昔の日本の雰囲気に触れたりする中で、もっと日本に長く残りたいと思いました。いずれ、チャンスがあれば、長期間、日本に留学したいと思います。

## The story of me and Kyoto

Praditpruel Pitchaporn

I wish I would have a chance to say thank you to Shirakata sensei for being such a fantastic teacher. We feel so lucky to have gotten her as a teacher in Japanese3 class. I really loved this class from the start and never grew bored. I studied The Old Capital (translated English title of the Japanese “Koto”, which refers to the city Kyoto 京都) is a novel by Yasunari Kawabata. It made me understand the history of Kyoto better. Moreover Shirakata sensei always kindly wrote down difficult kanjis that I could not read, and helped me get organized, motivated, and above all, interested in learning, which is no small feat.

I felt very welcomed and involved by Kyoto university students. They always made sure I was always a part of the group and was comfortable and relaxed. I got an understanding of Japan that I would not have been able to get any other way. What is more, Indonesian and Vietnamese students were very nice to me that made me so glad very much.

This is my first time in Kyoto. So I did not know anything about Kyoto as much as it should be, but studying here made me have a chance to learn the history of Kyoto. With over 1200 years of history, Kyoto boasts wonderful historic scenery along with traditional architecture and beautiful nature. At the same time, Kyoto is a city of learning and creation with cutting edge universities, research institutions and companies. This harmony of preserving tradition (while continually innovating) is a uniquely attractive feature of Kyoto. I wish I could have a chance to visit here again.

In the future, I would like to work as a Japanese interpreter or work at a travel company. I would like to be a Japanese interpreter in the future and possibly work as a tour guide for Thai visiting Japan.

The concrete actions I would like to take during my exchange were as follow:

1. Learn to speak Japanese fluently
2. Learn about Japanese culture
3. Learn about Japanese history and tourist attractions in Japan

The experience I gained during this exchange program was a wonderful chance to prepare for my future plans.



## ASEAN 諸国の学生を迎えて

押村 亜沙美（農学部2回生）

私はこのプログラムで、留学生の迎え入れ、日本語授業の補助を主に行ったので、この2点について報告します。

まず、迎え入れについてです。私は留学生を関空で迎えました。留学生の大荷物の大部分が郷土料理で占められていた事が印象的でした。母国の春節の料理を持参する人もいたり、各国の文化が垣間見え、興味深く感じました。そして、プログラム中に複数の留学生が宗教行事を行う必要があると分かり、焦りましたが、それぞれが信仰する宗教の施設が京都にあった為、無事に終わられました。その際、京都は寺社仏閣が多い一方で、他宗教にも寛容だと感じました。また、一部の留学生は、緊張からか、初めは日本語を話すのが不慣れでしたが、一週間後に会った時に日本語が上達していたことに驚き、また不自由なく会話できるようになっていたことを嬉しく思いました。

次に、日本語授業について述べたいと思います。私は、母語が日本語で、特に体系的に日本語を学んだことがなかったので、普段何気なく話すフレーズに法則性があることを学び、日本語の良さや難しさを体感しました。また、授業中に留学生と各国の文化について話す機会が多くあり、生活に根付いた文化の違いを知ることができてとても面白いと感じました。

上記の迎え入れと日本語授業以外にも、文化講義等を通して、多くのことを学ばせて頂きました。日本にいながら国際交流を楽しむことができ、とても有意義な時間を過ごしました。プログラム中お世話になった方々に感謝したいと思います。



## 「京都で学ぶアジアと日本」研修 2016

清島 優花（農学部3回生）

「京都で学ぶアジアと日本」という名の通り、本プログラムは、京都（日本）にいなからアジアの学生との交流や文化学習の機会を得ることができ、非常に貴重な経験となりました。参加学生かつサポーターという立場で関わらせていただき、文化講義の受講、文化体験、食事、観光など、様々な場面で留学生と行動を共にするなかで、他国のみならず日本に関して、新しい学びや発見の絶えない2週間となりました。

最終発表のサポートの際には、交流学生の出身国との比較のために日本のことについてあれこれと聞かれたのですが、これまで疑問に思わなかったことを「なぜ？それって変じゃない？」と指摘されて初めて、日本での当たり前が必ずしも通用しないことに気が付きました。文化・価値観など多様なバックグラウンドを持つ者同士の交流を通じて、自分がこれまで持たなかった視点をもつようになり、他国だけでなく自国や自分自身への理解がさらに深まることも、国際交流の面白さであると改めて感じました。

最近色々な場所で「グローバル化」という言葉を耳にしますが、これは裏を返せば、より「日本人であること」の重要性が増すことではないかと思えます。世界という場においては、私という一個人であると同時に「日本人」としても見られているという意識を持ち、日本のことやそれに対する意見を求められたときにはその両方の立場から胸を張って語れるような人でありたいです。



## 同じところ違うところ

于再治（工学部1回生）

普段テレビで ASEAN や東南アジアの国々についてよく耳にしますが、その国々について私は何も知りませんでした。それでは恥ずかしいと思い、東南アジアに対する理解を深めようと、今回このプログラムに参加しました。約二週間を留学生とともに過ごして、日本と同じところ違うところを見つけることができました。

SNS やインターネットが発達したおかげもあってか、留学生と交流して全然違う国の人だとは感じませんでした。日本の漫画やアニメは人気ですし、韓流スターも人気でした。また、留学生たちの服装も防寒対策の整ったものでした。京都は冬だから当たり前ではないかと思われるかもしれませんが、よく考えてみると東南アジアの国々は多くが熱帯・亜熱帯気候に属していて、京都みたいに寒くなるということはないはずです。また、ファッションに対する価値観が共有されていることにも驚きました。

もちろん、違うところもありました。その中で特に自分の理解が足りないと感じたのは宗教に関することです。インドネシアから来た留学生の中にはイスラム教の方が二人ほどいました。知識として豚肉はだめだということを知っていましたが、いざ一緒にご飯を食べに行くとなると、すっかりそのことを忘れてお店を選んでしまいました。また、食事前にお祈りをする生徒もいましたが、そのことを知らずに自分だけ先に食べ始めてしまったこともありました。これからはもっと配慮できるようにならないといけないと感じましたし、日本社会として対応できているのかを考えるきっかけともなりました。

このプログラムを通して、東南アジアの国々との違いや同じところを知ることができ、とてもよかったです。テレビで得られる情報はほんの一部でしかないのだと改めて思い知りました。また、違うところを通して、少しではありますが、日本についてもう一度考え直すきっかけが得られました。この SEND プログラムをきっかけとして、これからも機会があれば東南アジアとの交流に参加したいと思います。





## 新たな始まり

伊藤勇太（経済学部3回生）

2週間タイ、ベトナム、インドネシアの学生と交流して感じたことが2つありました。

まず、予想以上に、参加学生の日本文化に対する造詣が深かったという点です。日本の伝統的な遊びであるけん玉を紹介する機会がありましたが、留学生たちは全員けん玉を知っており、過去に遊んだことがある人もいたほどでした。ほかにも、アニメや漫画に詳しい人、大正時代の作家が好きな人など、内容は様々でしたが、皆それぞれ日本について好きな点、詳しい点を持ち合わせているように見受けられました。

2点目は、異なる文化から集まった者同士で一つのテーマをもとにプレゼンを行うことの難しさです。今回参加した留学生は皆日常会話には困らない程度にコミュニケーションを取れていましたが、いざプレゼンのための話し合いとなると状況は一変しました。そもそも、何について話しているのかという認識がずれている、合意したはずの内容が後日になり誤って伝わっていることがわかるなど、異国語である日本語を介した議論の難しさを実感しました。議論を進めること自体の難しさに加え、グループメンバー全体で集まる機会がプログラム中には初日、最終日前日、最終日しかなかったため、顔を合わせて話す機会が多くありませんでした。このような機会を増やせば、来年度はさらに内容の充実したプレゼンを行えるのではないかと感じました。しかしその分、無事に発表テーマについて共通認識が得られプレゼンを行うところまで達成できたことには大きなやりがいを感じました。

またプログラム最終日には異なった国の学生がそれぞれの国に行く際にまた会おうと約束している光景が多く見られ、互いに絆を深めていることを確認できて非常にうれしく思いました。このプログラムが東南アジアと日本の学生の更なる交流の始まりになることを切に願っています。





SEND プログラム 2015 年度受入実施報告書

ASEAN 諸大学学生のための「京都で学ぶアジアと日本」研修 北京大学学生のための「京都サマースクール」

平成 28 (2016) 年 3 月発行

編集・発行 京都大学国際交流推進機構 国際交流センター／  
京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU)

〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
電話 (075) 753-5678

印刷・製本 株式会社 田中プリント  
電話 (075) 343-0006